中世丹南における職能民の集落遺跡

—鋳造工人を中心に—

鋤　柄　俊　夫

はじめに
1　河内丹南の鋳造関連遺跡
2　丹南の中世村落
3　河内鋳物師の存在形態
4　結　　言

論文要旨

大阪府南河内郡美原町とその周辺の地域は，特に平安時代後期から南北朝期にかけて活躍した「河内鋳物師」の本貫地として知られている。これまでその研究は主に金石文と文献史料を中心にすすめられてきたが，この地域の発掘調査が進む中で，鋳造遺跡および同時代の集落跡などが発見され，考古学の面からもその実態に近づきつつある。

ところで従来調査されてきた奈良時代以降の鋳造遺跡は，寺院または官衙に伴う場合が多く，分析の対象は梵鐘鋳造土坑と炉または仏具関係鋳型とスラグなどが中心とされていた。一方河内丹南の鋳造遺跡についてみれば，鍋などの鋳型片および炉壁・スラグ片は一般集落を構成する遺構群の中から出土し，炉基部をはじめとする鋳造関連施設の痕跡もその一部で検出される。これらは鋳造施設をともなった中世集落遺跡の中の問題なのである。そしてこの地域の集落遺跡は，河内丹南の鋳物師の本貫地であったという記録と深く関わっている可能性が強いのである。

小論はこの前提に立ち，丹南の中世村落を復原する中で特に職能民の集落に注目し，それが文献史研究の成果により示されている河内鋳物師の特殊な社会的存在とどのように関わってくるのかを考えたものである。

考察は中世村落研究と鋳造遺跡研究の２点に分けられる。前者では，灌漑条件を前提とした歴史地理と景観復原の方法から村落の成立環境を，文献記録と遺跡の数量化分析から村落の配置と規模および古代から近世にかけての移動を復原した。後者では，全国の鋳造遺跡の整理から遺構の特徴，日置荘遺跡の検討から遺物の特徴を抽出し，鋳造作業における不定型土坑と倉庫空間の重要性および，鋳造集団がもつ特殊な流通について指摘した。

これらの分析から，丹南の村落は成立環境の異なる条件により，少なくとも２つの異なった変化過程を示す可能性があり，それぞれに付属する鋳造集落においても同様な傾向のみられることがわかった。この仮説について，小論では日置荘遺跡をモデルとした鋳物師村落の景観復原を例に提示しておいたが，丹南鋳物師の２つの系統との関連の問題とあわせて，今後社会史的に復原検討されるべき課題とされよう。

はじめに

大阪府南河内郡美原町とその周辺の地域は，特に平安時代後期から南北朝期にかけて活躍した「河内鋳物師」の本貫地として知られている。これまでその研究は，坪井良平[1]・網野善彦[2]・河音能平[3]氏などによる金石文と文献史料を中心にすすめられてきた。しかしこの地域の発掘調査が進む中で，鋳造に関わる土坑・溶解炉および鋳型の出土で特徴づけられる鋳造遺跡または，同時代の集落跡などが検出され，考古学の面からもその実態に近づきつつある。

ところでこれまで調査されてきた奈良時代以降の鋳造遺跡は，寺院または官衙に伴う場合が多いものとされる。したがって検出される遺構は梵鐘鋳造土坑と炉床部，遺物は仏具関係鋳型とスラグなどの化学分析が中心となり，主にそれらについて構造と作業の復原が論じられてきた。石野亨[4]・五十川伸矢[5]氏らをはじめとする研究者によって，多くの点が明らかになってきたことはここで繰り返すまでもないであろう。

一方小論が対象としている河内丹南の鋳造遺跡についてみれば，それらはいずれも古代・中世の集落遺跡の一部として存在する。掘立柱建物・井戸・溝といった一般集落を構成する遺構群の中から鋳型片・炉壁片・スラグが出土し，その一部で炉基部をはじめとする鋳造関連施設の痕跡が検出される。鋳型についても鍋などの日常品がみられる。これまで調査例の多かった鋳造遺跡が，寺院にともなうと考えられるなど工房色が強かったのに対して，これらは鋳造施設をともなった生活の場としての中世集落遺跡であるという言い方ができるかもしれない。そしてこの地域の集落遺跡は，先に述べたように，中世日本の鋳造工人を代表する河内丹南の鋳物師の本貫地であったという記録と深く関わっている可能性が強いのである。

河内鋳物師の特殊な社会的位置づけと活発な交易活動の状況は，網野・河音両氏の考察を代表として文献史研究の成果により示されている。これに対して，考古学的に調査された遺跡の分析が示す状況はどのような景観を示すのであろうか。

これまで鋳造遺跡研究は技術面を主眼におく場面が多かったが，河内丹南を対象としたとき，それは河内鋳物師に関する文献史研究の成果を研究史とする中世集落遺跡研究の方法により，そこで生活していた職能集団の生活と社会的存在を復原する研究ともなりうるはずである。職能民の存在形態を課題とした小論の問題意識がここにある。

そこで小論では，河内丹南の中世遺跡の中から中世村落の分析をおこない，鋳造遺跡の中から職能集落の特質を抽出し，河内丹南における中世村落の一部を構成した「河内鋳物師」の集落と職能民の存在形態について考えることとしたい。

最初に鋳造に関わる丹南の古代から中世の遺跡を紹介し，その中で問題を整理することにより，中世集落と鋳造遺跡の景観復原的考察に進むことにする。

1　河内丹南の鋳造関連遺跡

梵鐘に代表される金石文などの記録から，平安末期から鎌倉期に活躍した河内鋳物師が拠点とした地域は，古代の丹南郡にほぼ一致することが知られている。その範囲は現在の行政区で南河内郡美原町を中心として，西は堺市金岡，東は松原市丹下から藤井寺市・羽曳野市の一部，南は大阪狭山市の北半，北は大阪市の一部におよぶ。地形的には，丹南の開発にとって要の水源である狭山池を南の端として，東は羽曳野丘陵，西は陶器山丘陵の北端を限りとした逆三角形を呈している。

この地域の遺跡としては，東の古市古墳群と西の百舌鳥古墳群の間にあって，黒姫山古墳と河内大塚山古墳があげられるものの，比較的遺跡密度の低い地域と評価されてきた。鋳物師の痕跡に関しても，美原町に所在する「鍋宮大明神」の石碑以外知られず[(6)]，文献と金石文以外ではあまり注目をひくことがなかったものと言える。ところが阪和自動車道の建設計画により，1985年よりこの地域を縦断する形での発掘調査が本格的にすすめられ，沿線の遺跡を中心とした多くの鋳造関連遺構が明らかとなってきた。

図1　調査地位置図（スクリーントーン部分が調査区）

以下，これらの調査成果を中心にこの地域の鋳造および集落遺跡の概要を述べる。

（1）観音寺遺跡[7]

松原市西大塚および立部に所在する。遺跡の大半は，標高35～29mで緩やかに北へ下降する中位段丘上に立地する。ただしその東端には南北にはしる開析谷がみられ，それを堰止める形で溜池が連なる。また大和と河内をつなぐ古代の幹線である竹内街道が遺跡の南を通過する。

調査区の全域から奈良～中世の建物群が検出された。このうち調査区の南半部には奈良～平安時代前期の建物群がみられ，「河内国丹比郡□□」の木簡も検出されている。一方中央から北半部には13～14世紀代を中心とした中世の集落が展開する。

中世の建物群は，調査区の北から約1町間隔で3群検出された。いずれも1/4町程度の領域に数棟の掘立柱建物をもつもので，同時期において疎塊村の一部を構成した孤立荘宅的存在と考える。また北と南の建物群は溝で区画された構造をなす。

スラグと炉壁片に代表される鋳造関連の資料は，これらの集落域から出土している。特に中央の建物群（D地区）に付属する井戸4からは多量の炉壁片が出土した。集落は14世紀前半代の中で一部重複しながら，56m²・37m²・20m²規模の建物がのべ4棟復原されている。集落の範囲は，東西域が不明であるが，南北は50m程度である。この時期の建物群として，区画溝をもたない点に特徴があり，存在した時期が短い点でも特徴をもつ。炉壁を出土した井戸は東側建物の南東で，整地により形成された段上に位置する。同時期の井戸は建物の北側でもみられ，あわせて1辺2m四方の方形土坑も伴う。

図2　観音寺遺跡遺構配置図

また南の建物群の区画外北西部に位置する土坑37は8×3.5m，深さ0.5mを測る隅丸長方形の土坑であるが，大量の瓦，14世紀後半頃の土器などと共に炉壁片が出土した。なおE地区の土坑からは「寺」・「西城房」の線刻が施された灯明台が出土している。

（2） 真福寺遺跡[8]

南河内郡美原町真福寺および下黒山に所在する。調査区の大半は中位段丘にあたる標高40～41mのおおむね平坦な地形を呈し，南西端部のみ黒姫山古墳の周濠へ向かう谷斜面となる。遺構の検出状況は，調査区の中央西よりを南北に流れる溝を境として大きく異なる。

調査区の中央から東北部は遺構の密度が低く，条里地割に対応する溝と奈良・平安時代の土壙墓群及び柵列を伴った中世の掘立柱建物跡と耕作痕が検出された。このうち条里地割に対応する溝からは10世紀中葉の資料が目立ち，8世紀まで遡る資料も出土している。36基以上を数える土壙墓群からは8世紀まで遡りうる須

図3 観音寺遺跡D地区建物群(上) 井戸4出土遺物(下)

図4　真福寺遺跡遺構配置図（右下：白炭窯）

恵器瓶子が出土している。また掘立柱建物跡に隣接する土坑からは10世紀代の土師器椀が出土しており，これについても中世を遡る可能性がある。なお北端で一部重複する白池・新池の堤は，近世以降の築造であった。

一方西南部からは中世の掘立柱建物および柱穴群をはじめとして，鋳造関連遺構，奈良時代の

白炭窯，瓦窯などが確認された。

鋳造関連遺構は11基の土坑から構成され，東西10m，南北8.5mの範囲で西に開いた「コ」字状の配置を呈する。立地は中位段丘が西側の開析谷へ下降する直前の台地上平坦面にあたる。

1号土坑は東端に位置し，南北に3基の土坑が連続した構造をもつ。各々の土坑の規模は2.4×3.0，1.4×1.2，1.5×2.0mであり，平坦な底面の深さは検出面下0.5〜0.6mであった。埋土からは，スラグ，鍋をはじめとする鋳型・溶解炉・土師器・瓦器片，多量の灰などが混在した状態で出土した。

鍋鋳型は2個体復原されている。いずれも深さに対する口径の大きなもので，口縁部は「く」字状に外折している。共に外型であり，製品を推定すると，口径32cm，深さ10.5cmのものと口径27.2cm，深さ11.8cmのもので，前者の容量が約3升，後者が約2升弱とされる。

2号土坑は遺構群の北中央に位置する。底部に地山

図5　第4調査区鋳造関係遺構（写真からのトレース）

図6　鋳造土坑平・断面図

の削り出し部をもつ鋳造土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し，規模は東西3.25m，南北2.7m，深さは0.6m残存していた。土坑の底部には1辺約2m，高さ0.15mの方形の高まりが削り出され，その上面で幅10～15cmの平行する5条の溝が確認された。それらは鋳型を固定する際の掛木の痕跡である可能性も指摘されている。壁は北・南・東面が垂直で，西面は階段状につくられている。また壁際の2カ所に小穴が認められた。埋土からは鋳型・溶解炉片，瓦器・土師器片および灰が出土した。

なお2号土坑の西側に近接して，東西2.9m，南北1.7mの隅丸長方形の土坑がみられる。残存する深さが0.2mと浅く，埋土に焼土が含まれていた点などから，2号土坑に付属した溶解炉の設置位置と考えられている。

3号土坑は遺構群の南中央に位置する。一部削平されているが1辺が2.4mの方形土坑に復原される。なお残存する深さは0.2mであった。埋土に含まれる遺物は1・2号土坑同様であるが，特に文様の残る鋳型が多く出土した。文様は，水草状，飛雲文，唐草文などで，梵鐘の鋳型であると考えられていたが，大型の釜につけられたものである可能性の指摘も受けている。

なおこれらの遺構の時期は，同時に出土した瓦器椀から13世紀中葉頃の時期が比定できる。

鋳造遺構群とほぼ同時期の遺構として，2棟の掘立柱建物跡が復原され，ほかに中世に属する

図7　出土遺物（鋳型，瓦器椀，東播系擂鉢）
1～8：3号土坑，9～12：1号土坑，13：2号土坑

と考えられる100個以上の柱穴が検出された。このうち1棟は鋳造遺構群の東約60mに位置する。東西に長い3×3間の建物で，面積は約55m² を測る。別の1棟は鋳造遺構群から約80m南に位置する。南北に長い2×3間の建物で，面積は約52m² を測る。

白炭窯は横口を有する炭窯である。鋳造関係遺構群の南約85mに位置する。立地は中位段丘が西側の開析谷へ下降する傾斜変更線にあたり，南に隣接する瓦窯同様その緩斜面を利用して構築されている。窯は0.8×3.3mの長方形プランを呈する焼成部を中心として，煙道に向かって右側に3カ所の横口と2.4×4.5mの側庭部をもつ。側庭部から8世紀代の須恵器杯が出土している。金属加工に必要な白炭を生産したものとされる。

（3） 太井遺跡[9]

美原町太井および下黒山に所在する。黒姫山古墳を東北端，西除川を西端とする。調査区は，東部を黒姫山古墳の東西を南北にはしる開析谷に，西部を西除川の谷底平野に挟まれ，中央部に中位段丘を配する。比較的起伏に富んだ景観を呈する。

調査区の概要としては，谷底平野に近い西部から旧石器および縄文の包含層が検出され，一方黒姫山古墳の南にあたる調査区東部から帆立貝式の古墳と，平安期のスラグを含む河川と室町期の集落が検出され，中央部で飛鳥～平安前期の建物群とあわせて鋳造関連の遺構と遺物が検出された。

調査区の中央部で検出された遺構群は，7世紀後半から9世紀におよぶものである。このうち飛鳥・奈良時代の建物群については少なくとも2時期の段階が考えられている。7世紀後半の建物群は，条里に対応する溝を南と東の境界とする方形の区画集落である。集落の全体が調査区外の北にものびるため建物群の構造の復原は一部に限定されるが，東西約80m，南北約45mの範囲に倉庫・主屋などが配置され，一角にはその内部をさらに溝で区画した部分もつくられている。

8世紀前半の建物群は，前代の溝をすべて埋め，建物の中心も東から南へ移動または分散し，前代の建物群の位置をほぼ踏襲する北部建物群と，南へ70～80m離れた南部建物群に分かれる。北部建物群の最大建物は東西2間，南北4間で東西と南に廂構造をもつもので，当群の中心建物とみてよいだろう。また厳密に前代との時期の識別をすることはできないが，西には倉庫建物が配置される。一方東には井戸をともなった建物が一棟みられる。前代と異なり溝で領域を規定する状況はみられない。

南の建物群は，北側に平行する東西方向の2条の溝と柵をもち，5棟以上の建物が復原できる。建物の規模は2×3間以上で，少なくとも2時期が認められる。

鋳造関連遺構はこれらの建物群の中間に展開する。主要な遺構は3カ所の竪穴土坑である。このうち3号竪穴から，8世紀前半の土器とともに炉床状遺構と多量の坩堝，スラグなどが検出された。

1号竪穴は上面の削平が著しいためこの状態が当時の形状をそのまま残したものかどうか検討

図8　太井遺跡遺構配置図

図9　太井遺跡7・8世紀集落と鋳造遺構の配置

の余地はあるが，検出段階では東西に長い不定形の輪郭がみられ，掘削後は数カ所の小穴をもつ三角形の形態を呈した。床面は北部を中心に浅い凹凸がみられ，深さは20cmを測るに過ぎない。規模は南北4.5m，東西6mである。

埋土は基本的に3層に分かれ，上層および中層から多量の鉱滓および坩堝の破片が出土した。いずれも底面からは浮いた状態の出土である。また2カ所で焼土の集積が検出された。ともに遺構の西辺中央部で南北に分かれて位置してみられた。このうち南側のものは東西1.1m，南北0.5m，厚さ10cmで盛り上がった状態で検出された。なおこの焼土と床面の間には炭・土器を含んだシルトがみられ，焼土の上面からは和同開珎が出土した。

2号竪穴は6.2×3.4mの隅丸長方形を呈する。確認された深さは18cmである。埋土から土師

図10　鋳造関連遺構と出土遺物
（1～10：坩堝・取瓶，11：羽口，12・13：須恵器蓋・坏，14：統一新羅系土器，15・16：土師器皿・甕）

器・須恵器片とともにスラグの細片が出土している。南端にピット状のくぼみをもつものの底面には柱穴などの構造物は認められなかったが，1号竪穴同様に不定型な凹凸が認められた。

3号竪穴は6.2×2.2mの長楕円形を呈し，深さは40cm程である。8世紀前半の須恵器・土師器類と共に多量の炭，鞴の羽口，および100個体以上の坩堝が出土した。また鋳型は検出されなかったが，銅鋺の一部と思われる破片が検出された。

溶解炉の基底部跡は3号竪穴を3分する位置で2基検出された。直径40cmの円形を呈する浅い擂鉢形の土坑で，焼土を埋土としている。この上に炉が設けられ，坩堝を使った銅の融解が行われていたものと考えられる。坩堝は直径が15cm前後の半球形を呈する。ほとんどは同時期の土師器甕を外容器とし，その内側に粘土を貼り付けて作られている。全体に被熱が著しく，口縁部を中心としてガラス化したスラグが厚く付着している。容量は200cc程度であり，小形品の鋳造が想定される。なおスラグの分析によれば，その組成はスズが6％以下を示す美術青銅の組成に近いとされる。

また坩堝は，南建物群の北を区画する溝からも出土している。

9世紀の状況として，上記建物群の西側斜面から石帯が検出された。南側の建物群に伴う遺物が少ないため，少なくとも2時期に区分されるうちの後半期に該当する可能性もある。

10世紀代の状況としては，建物群の西150mの位置でスラグの集積とピットの検出がある。スラグの集積は，建物群の西側を北流する西除川の旧流路の斜面に廃棄された状況であり，範囲は約37×18mにおよぶ。なおピットから10世紀前半の黒色土器椀が出土している。一方調査区の北部では，浅い谷地形の底を流れる幅1.5～3mの流路で炭とスラグの集積がみられた。範囲は約20mの長さにおよび，その下層から延喜通宝（907～957）が3点出土している。

さてこの遺跡の評価であるが，この地域の豪族であり，銭鋳司の長官を勤めたこともある多治比真人氏との関連が考えられている。建物が小規模なため，太井遺跡をその本拠地とするまでにはいたらないが，真福寺遺跡の白炭窯とあわせて，少なくとも太井遺跡の周辺が，多治比氏の系列にあって，奈良時代から金属加工に関連する集団の居住地であったことはまちがいないであろう。また，鋳造関連の遺跡として9・10世紀へ連続するものであり，この遺跡が中世の河内鋳物師へつながる可能性もある。

（4） 日置荘遺跡[10]

堺市東北部の日置荘西町～原寺および美原町西部の北余部に所在する。立地はおおむね平坦な中位段丘上にあたり，東端部のみ西除川へ向かって下降する斜面部と谷底平野をもつ。遺跡は奈良時代以降の特に鎌倉～室町期の集落遺跡の展開を特徴とする。建物群はそのほとんどが区画溝をもつ構造であり，その区画も現在の地割に一致する場合が多い。また調査区中央西よりでは奈良～平安の建物群が集中し，さらにその西で鎌倉期の墓も確認されている。

鋳造関係の遺構・遺物は，調査区の東半部に展開する中世の集落跡から検出された。

平安時代末期の磬の鋳型，12世紀後半から13世紀代の鋳物師集落，14・15世紀代の屋敷区画内での鋳造の痕跡と鉄瓶の出土などがあげられる。

磬の鋳型は中央部東よりの地点から出土した。鈕を含めた約1/3が残存しており，復原すると横約14cm，縦約4cmの大きさとなる。鋳型に文様はみられず，片面磬と考えられる。近接した位置で平安末期の瓦を伴った土坑が検出されており，その関連が考慮される。

図11　日置荘遺跡遺構配置図（左下：磬鋳型，右上：東部鋳造関連土坑群）

図12　日置荘遺跡Ｉトレンチ建物群と鋳造関連遺構

鋳造遺構を伴った集落はＩトレンチで検出された。検出された遺構は掘立柱建物・井戸・溝および鋳造関連遺構であり，建物群は主屋・副屋・倉庫からの構成が推測され，少なくとも２時期の建て替えによる段階が復原される。

鋳造関連施設としては鋳造作業にともなう廃棄土坑・スラグとともに，溶解炉の基底部と石組みの炉床が確認された。炉は直径が約50cmを測り，高さは約30cm残存している。炉壁はスサの多い粘土でつくられており，内面は高熱によりガラス化した状態が認められる。炉床は地面を掘りくぼめてつくられており，基底部より一段高い位置には，炉の外周を補強する形で高さ30cm程の石組が設けられている。

出土遺物に製品はみられなかったが，鍋または釜の鋳型片と，13世紀を中心とした瓦器椀・土師器羽釜・東播窯の擂鉢，中国製の青磁・白磁および，常滑窯の甕と擂鉢，瀬戸内東部で生産されたと考えられる須恵器系の甕などがみられた。ほかに黒色土器も出土しており，集落の起源が11世紀まで遡ることも考えられる。

図14　溶解炉基底部

また堺市教育委員会の調査によれば，この建物群の北200mの位置で11世紀後半の集落と13世紀代の鋳造関連遺構も確認している。検出された遺構は平面形が隅丸の方形または長方形の土坑および溝である。土坑から鍋鋳型などが出土している。

14～15世紀の鋳造関連遺物は，遺跡の中央部から東にかけて分布する，溝で区画された屋敷地内から検出された。いずれの屋敷地も溶解炉などは認められなかったが，溝に廃棄された多量のスラグや，鋳造土坑に似た一辺2m程度の不整形な土坑，鍋などの鋳型の出土から，これらの屋敷地内で鋳造作業のおこなわれていたことが推測される。

溝で区画された中世の屋敷地は18カ所以上確認された。最も規模の大きな区画は東西1町を占めるもので，幅5m，深さ0.9mの溝で区画され，溝の内周に遺構の少ない区域をもつことから，小規模な土塁を伴っていた可能性も考えられる。内部にある土坑から鋳型が出土している。同様に調査区東部では幅7m，深さ1.5mの溝（堀）で区画された屋敷地も調査された。なお調査区中央部では区画溝の連続する構造がみられた。これらは瓦の大量廃棄と瓦製仏具の出土から，寺院の一部である可能性が考えられている。

（5）問題の整理

これまでみてきたように，丹南の中世遺跡には大きく二つの問題が含まれている。その第1点は，それが耕地も含めた普遍的な意味での中世村落の一部を示しているという事実であり，第2

点は復原されるそれらの村落のいずれかは，鋳造作業に関わった職能民の集落として性格つけられるという事実である。したがってここでは，この2点についてのこれまでの研究を前提として問題を整理する必要がある。

考古学の方法で奈良時代以降の村落について研究する場合，その対象は集落が中心とされる。このうち畿内の集落遺跡については，橋本久和[11]・原口正三[12]・奥野義雄[13]氏の研究が緒とされる。そこでは文献と歴史地理の成果による集落内構成員とその立地を前提とした建物群の復原と分類がおこなわれ，集落内部での結合または階層的な問題，および変遷過程が示された。この方向は基本的にその後の集落遺跡研究においても踏襲され，石神怡[14]・坪之内徹[15]・中井均[16]・広瀬和雄[17]氏らによって集落と屋敷地の分類・類型化がおこなわれ，佐久間貴士[18]氏によって建物群と遺跡の消長時期および建物群の集合化（集村化）をもとにした，平安時代以降の変化期の考察がおこなわれた。また中国製陶磁器などを基準にした階層（従属）性の議論もおこなわれている[19]。このように畿内の集落遺跡研究は，おおむね建物群の普遍的な類型化による変遷過程と階層性の説明に集約できると言えよう。

ところで，中世丹南における職能民の存在形態を課題とする小論において，最初の問題は丹南における中世村落の説明である。中世丹南の村落が古代との関わりを経てどのような立地に存立していたのか。それらはどのような領域において，どの程度の規模の集落と耕地を有し，どのような構成員によっていたか。さらにこれらの村落間にはどのような関係があり，それらがどのような空間的変化[20]により近世へ移行していったのか，である。

一方先に述べたように従来の集落遺跡研究の方法は，歴史性を重視したために，集落構造の普遍的な類型化を第一義においてきた。したがって広瀬和雄氏も指摘しているように[21]，集落遺跡は発掘範囲の制約からそれが集落全体の領域を示しているとは限らず，資料とした建物群の類型化が，普遍的には有効であっても，厳密にはその村落の部分的な状況を示しているにすぎない可能性も内在している。またこれらの方法はひとつには，生産の拡大による一部の農民の成長と集落内構成員の分化を前提とした農耕村落をモデルとしているものであるが[22]，発展段階的な指向の中で，資料批判としての立地と地域性も考慮されなければならず[23]，特に丹南の場合は職能村落を含むため，それがそのまま援用できるか問題となる。

そのため，小論に求められる最初の視点はその意味において歴史性より同時代性である。ここで必要とされる作業は，特定地域における村落各々の個別的な特徴の抽出である。例えば領域をはじめとして，村落を構成する各種の要素をできるだけとりあげ，整理し，それぞれの特徴を示すあらゆる要素を検討することが必要とされる。この作業により，一般的な農耕村落ばかりでなく，さまざまな鋳造工人の村落の状況も説明されることになる。

一方中世村落に対する文献と歴史地理からのアプローチは，長い蓄積と多岐にわたる内容を有している。地方史研究協議会による中世村落特集での大会討議[24]および小山靖憲[25]氏によるそのまとめによれば，荘園との関わり，村落内結合および階層と領主制との関係，社会史的方法，耕地お

よび開発と領域・景観論などがみられ，中世村落の多様なあり方が示されている。そして中世集落の構造について様々な考察の方法が語られているが，そのなかに景観復原的考察がある。

木村　礎・原田信男氏によるこの方法の特徴のひとつは，マクロ的な視野で描かれる中世の様々な土地空間において，その開発形態と村落個々の発展段階が多様であることを重視するところにある。そのため，個別事例の分析から一般化した議論を展開するよりも，歴史地理・文献史料・絵画および野外調査などを用いて，「地形の歴史的な解読を行い，集落の設定と耕地の開発を跡付けた上で，中世の村落景観を個別的に復原[26]」することが重要な指向とされる。なによりも「村落民の生活の場というきわめて具体的な枠組の認識」がなければ「彼らの生活（共同体なかんずく村落共同体）の実相にせまることは[27]」考えられないであろう。

また，地表に遺されたあらゆる歴史地理的条件と文献・絵画史料を中世村落の景観復原的資料とした際，それらの属性の組合せからされる村落の説明は，考古学が用いる様式論的方法と対比されるものともなろう。小論ではこの観点にたち，中世丹南の村落景観の復原に際して，木村・原田氏の景観復原的方法をもちいることにする。

この方法により，たとえば中世村落の景観研究で不可欠な集村化についても，それを現象説明的ではなく原因説明的におこなう必要がある。加えて階層差と遺跡の個別性の検討は，吉岡康暢氏による北陸の初期荘園を対象とした分析[28]を小論の基本的な方法としたい。

2　丹南の中世村落

前章でおこなった整理のうちで特に問題とされるのは，領域を踏まえた村落の配置とその動的な景観復原である。しかし考古学データの集積だけではこの課題に応えることができない。そこで本章では地理的・文献史的なデータによってその条件を整備し，丹南の村落景観と集落の構造を復原するために必要な要件を提示しようと考えている。

（1）　地理的条件

大阪府南部の地形は，和歌山県との府県境を形成する和泉山脈と，そこから緩やかに下降して北上および西進する複数の尾根と丘陵を特徴とする。このうち北へのびる尾根の一端は羽曳野丘陵を，別の先端は陶器山丘陵などの高位段丘を形成し，古代須恵器生産の拠点である陶邑遺跡の基盤ともなった。そして丹南鋳物師の本貫地とされるこの地域は，中央に西除川を配して，羽曳野丘陵と陶器山丘陵にはさまれた，北へ開く扇状地形の中に位置している。

おおむねその表面は起伏の少ない平坦な台地状を呈するが，地形の細部によれば，南北方向を軸とした複数の開析谷または旧河道の存在が知られる。西除川の周辺でみられる谷底平野とあわせて，古代から中世にかけては，比高差数m以下の段差が各所で見られたものであろう(図15)。これらの谷地形のうち最も規模の大きなものが，現在の西除川の氾濫原および谷底平野に対応す

る「古天野川」の侵食である。当初その流路は現在の高位段丘上も含めた広域におよんでいたが，下刻により中位段丘を形成してこの扇状地をつくりだしたものとされている。その後中位段丘の間にできた谷を埋めて，西除川の右岸に沖積段丘が，やがて氾濫原・谷底平野・自然堤防などの形成が進められたと考えられている。[29]

このなかにあって，6世紀後半から7世紀初頭頃に，「古天野川」の開析による谷底平野を堰止めるかたちで狭山池が築造された。[30] これにより，それまで耕作の困難であった中位段丘上の部分が灌漑可能の地として開発の対象となったのである。もっともその主たる水路は西除川であり，東除川は慶長13年の狭山池改修と近い時期に，旧流路を利用して切り開かれた運河であることが，記録と地形的な条件から知られている。[31]

図15 丹南周辺の地形

したがって本項が検討を必要とする土地条件は，中位段丘（段丘下位面），沖積段丘（段丘低位面）および氾濫原の区別および，狭山池を代表とする水利環境に集約されよう。[32]

さて，歴史地理の分野から土地条件と荘園絵図および文献史料により村落と耕地の関係を分析した最近の研究としては，金田章裕氏による一連の論攷が知られている。[33]

このうち奈良・平安期の家地を示す地理的な条件は，自然堤防上などの微高地と不自然な地割などであり，その配置は孤立荘宅と小村と疎塊村とされている。[34] 一方中世の家地についてはどうだろうか。金田氏は13世紀半ば以降の築造によって知られる「西大寺新池」を代表として，中世における灌漑条件の改善が進められていったことを指摘しているが，集約的土地利用の安定化をひとつの契機として集村化がおこなわれた結果，その立地は自然堤防的なわずかな微高地から，より規模の大きな自然堤防を核として屋敷が集中する尾張国富田荘の例により説明される場合が多いものとなっている。[35]

図16　昭和36年測量図による丹南の地形

〔池名称〕　1新池，2今池，3潰池，4寺池，5西ノ池，6長池，7寺池，8西池，9蓮池，10樋野ケ池，11ノドガ池，12大泉池，13穴池，14尻池，15青池，16浜塚池，17下ノ池，18鯉野池，19松室池，20小治ケ池，21今池，22広池，23上池，24頭泉池，25下津池，26奉田池，27加呂登池，28平池，29尻池，30大池，31北池，32東池，33尻ノ池，34清堂池，35宮ノ池，36増池，37地蔵池，38阿湯戸池，39九頭神池，40蓮池，41太鼓池，42鍋田池，43出ジボ池，44大座間池，45長池，46森池，47寺池，48城池，49堂池，50松池，51菅池，52小督池，53鴨池，54埴池，55細池，56吉田池，57神殿池，58西池，59菅池，60奥池，61白池，62横枕池，63清意之坊池，64小池，65下ノ青池，66上ノ青池，67細池，68長池，69芦池，70石池，71大池，72座王蔵池，73寺池，74中ノ池，75桂池，76宮路池，77大池，78小池，79小出山池，80国分池，81落池，82城ケ池，83花田池，84星谷池，85大津池，86加古里池，87前池，88西池，89東池，90三保池，91前池，92更池，93蓮池，94宮ノ池，95田池，96下土塔池，97上土塔池，98羽室池，99灰原池，100坊池，101更ケ池，102コマケ池，103中池，104上代ケ池，105寺池，106笠田池，107こそ池，108剣池，109桝池，110掛池，111松池，112美濃池，113前池，114平池，115芋池，116船渡池，117平尾新池，118石池，119高池，120中池，121九文度池，122赤銅池，123鶴池，124柏原池，125岸面池，126太池，127大池，128阿弥新池，129コモ池，130菅生新池

ところで金田氏を始めとする歴史地理学の研究は，当然文献または絵図により記録の残っている地点がどこであるかを明らかとし，その立地を一般化することにより，当時の集落と耕地の関係について考察する立場をとっている[36]。しかし本論の対象とする地域は文献史料のきわめて少ない地域であり，そのためここでは歴史地理学の方法で整理された集落と耕地の立地条件を普遍的な前提とし，そこから遡及することにより集落と耕地の立地可能な地域を推定することになる。ただし既に古代より開発の進んでいた河内において，古代郷の名残を全く否定することはできず，中世集落の配置もその系譜と関わりがあることは家地の立地条件として付与できるはずである。

最初に耕地条件を通してその立地についてみてみたい。耕地の成立と維持に必要な要素は水利と灌漑である[37]。ところがこの地域は瀬戸内式気候に属するばかりでなく，規模の小さな河川が段丘面より低い位置を流れているため[38]，古代より水利の困難な土地として知られていた[39]。この地域の地理景観を特徴づける多数の溜池はこの理由から築かれてきた。したがって，中世の耕地を復原する最初の作業は，近世以降に築かれた溜池を排除することからはじめられることになる[40]。換言すれば，近世以降に築かれた溜池の灌漑範囲は，中世以前では耕作不適合地として，中世村落の領域構成[41]を推定する手がかりとなりうるはずであろう。

当地域の溜池は「公有百三拾有余」と称されてきており[42]，昭和30年代前半までの段階でも図16内で150を超える溜池を数えることができる。このうち記録により築造時期がわかるものは，大阪狭山市内で天正以前が2，以降が28，不明が17[43]，堺市（丹南地域）では「年数知れず」を含めた天正以前が6，以降が7[44]，松原市では文禄検地以降の記載はみられるもののそれ以外の状況は不明となっている[45]。全体の3割にみたない情報であるが，過半数は近世以降の築造とされる。

一方金田氏は大和盆地における溜池の形態・小字名・立地などを手がかりとしてその築造時期と機能を考察している[46]。その方法により当該地域をみると，形態的にいわゆる皿池と谷地形を利用した不整形な池に2分されることは明らかであるが[47]，さらにこれを地形的にみると，中位段丘上では両者が，沖積段丘上では前者，氾濫原では東西に長く延びる形態が認められる[48]。またこれらの皿池は灌漑が及ぶと推定される地域の中でも高い位置に築かれている場合が多く，金田氏が指摘するその機能と一致している。

次に字または名称による溜池の分類であるが，その表記はおおむね時期（新・今・芋・上代・枡・増など），形状・規模（長・広・細・蓮・平・更・大・小など），位置1（東・西・北・前・尻・上・下・奥・中など），位置2（寺・宮・地蔵・神殿・清堂・城・堂・坊など），およびその他に分けられる。このうち金田氏の整理と同様に「新池」が「皿池」と対応する例は多く，今池についても原則としてその傾向がうかがえる。さらにこれらの池に接する「増池」は，より新しい時期の築造と考えられ，形態は「皿池」型である。同様に位置1とした名称は，既に存在する集落または池などに対する位置関係の表記である故に，それぞれの対象以降の築造となるものであろう。例えば西除川左岸で近世集落との位置関係を示す場合，または「新池」にはさまれた「中池」などがみられ，それらの形態も「皿池」型である。

図17　条里地割図（昭和36年測量図から）

これに対して「谷池」型の溜池は，東除川の左岸を孤状に連なる一群，沖積段丘の東辺で南北に連なる一群，西除川の左岸で中位段丘上中央部を南北に連なる一群および，図16の南西部で南東から北西へ連なる一群がみられる。[49] いずれも旧河道などの谷地形に沿ったもので，池の名称は上記の分類で位置2およびその他としたものが多い。両者はほぼ対照的な関係にあると言え，その意味でこの地域の傾向も，金田氏の整理を跡付けた形になっている。その結果，各溜池の個別性が強く一般化は困難であるが，発掘調査の成果とあわせて，[50] 上記の要素で条件付けられる「皿池」型の溜池はおおむね近世以降，「谷池」型の溜池は中世以前の築造と推定することが可能と考える。[51]

ところで図16で示される地域内の皿池は全体の約4割にあたり，ほとんどが西除川の左岸に平行する一帯と丹上周辺の中位段丘上に限定できる。これらの地域は特に段丘上でも高い位置にあたり，該当する丹上・真福寺・日置荘遺跡などの調査でも，現代の耕作土の下で古代・中世の耕作土を確認しない状況がみられた。あわせて古代中世における耕作の機会の少なかった可能性を示すものであろう。しかし大半であるそれ以外の地域においては，皿池のほとんどが近世以降の築造だとしても，中世以前においてなお「谷池」型の溜池が灌漑の機能を果たしていたようであ

る。しかもそれは地形条件に反映された東西分割の灌漑単位とも言い換えることができよう。

一方この地域の地理的景観を特徴づけるもうひとつの要素に条里地割がある。その内部の土地利用に関する質的密度は問題とされるもの[52]の，それが古代における耕地の開発と整備に深く関係していた可能性は高く[53]，その意味で条里地割のずれが施行単位や施行時期の違いを示している可能性も指摘されている[54]。当該地域において条里地割の基本線は竹ノ内街道・長尾街道にみられる東西線にある[55]。それらは西除川を渡る位置関係にあってもずれはほとんどみられないが，南北線はわずかに方向を振る場合が多く[56]，おおむねその境界は条里地割のみられない地区となっている。なお，条里のみられない地区の理由について，それが最初から施行されなかったのか，消滅したのか問題となるが，仮に開発単位を前提とした条里地割の方向のずれがその部分で途切れるとするならば，それは当初より積極的に条里地割が施行されなかった場合も考えられることになる。

以上，これらの条件を付与して整理したのが図18である。斜線部は沖積段丘上であり，灌漑条件が良好で条里地割の施行とも一致している。中位段丘のうち，溜池条件から西除川の左岸沿いの一帯と丹上を耕作不適合地域としたが，条里地割の遺存状態との関連は明らかに示しえていない。しかしそれ以外の地域において，条里地割の分布はおおむね「谷池」溜池とこれをつなぐ水

図18　条里地割の分布と地形および「屋敷」字の関係

路[57]の北側（下流側）でみられるものと考えられ，さらにそれを条里地割のずれによる推定開発領域が分割していることになる。

また美原町の今井・小寺・大保・真福寺・丹上で，「屋敷」関連の字名を抽出してみると，それは条里地割のみられない部分に配置されている[58]。しかもそれらはまた沖積段丘に接する中位段丘上に立地しており，一方で中位段丘中央部にあたる丹上地区ではみられないものとなっている。先に，条里地割のずれが古代における開発領域の境界となった場合の仮説を述べたが，ここでとりあげた集落は，おそらく近世とは異なるが，中世後期をどれほど遡ることができるかの時期にあたる。したがってその場合，条里地割の空白部分は，中世の開発による（集村化の進んだ）新たな集落の配置を示す可能性も考えられることになる。しかも日置荘遺跡をはじめとして，条里地割の乱されていない地域での集落の存在が確認されている以上，近接した地域であっても，中世集落には条里地割に取り込まれた村落とそうでない村落の区別が存在する可能性も示唆されることになってくる。

以上，丹南地域における中世以前の耕地と開発単位および集落の立地に関して検討を加えた。しかしこの地域区分では集落または村落の景観復原に不十分であることは否めない。そこで次に文献史的な資料を加味し，さらに環境を整えることにする。

（2）　文献史的条件

5世紀までさかのぼる黒姫山古墳[59]と雄略陵説のある河内大塚山古墳をはじめとして，日本書紀にみえる仁徳天皇14年条の難波大道の記事，反正天皇元年10月条の「河内の丹比に都をつくる。是を柴籬宮と謂う」の記事および，天武元年（672）条の大津・丹比の両道[60]の記事などにより，この地が古代より，大和と難波をむすぶ重要な地域であったことは明らかである。

そのなかにあって，小論が対象とする地域はひろく丹比郡に含まれる。同郡内の村落の名称としてもっとも早く文献にみえるのは日本書紀の仁徳天皇14年条に載る「丹比邑」である。その位置については布忍村・松原村または金田村などの候補があるが，未だ明確ではない。また前項で取り上げた狭山池に対して，崇神62年10月条などによると丹比郡の北西部には「依網池」が築かれ，天皇の権力によって開発されたと考えられる依網屯倉の設置などにより[61]，この地域の北部の開発が進んでいたことが知られる。

一方「新撰姓氏録」によればこの地に居住した氏族には，丹比連とその同族および丹比公の一族をはじめとして，土師宿禰，布忍首，依網阿比古，依網連，依網造，物部依網連，中臣酒屋連，阿保連，村山連，上道，尋来津公，菅生朝臣，矢田部首，狭山連，船連，葛井連，津連，河内画師，秦，河内連，河内造，三宅史などがみられる。

これらを地域毎にみると，丹比郡北部では，布忍・依網・阿保・三宅・矢田部などの系統および，中臣酒屋連が現在松原市三宅町の屯倉神社に祭られている式内社の酒屋神社との関係，上道波提麻呂が天平勝宝2年（750）の記事により，三宅郷に居住していたことが推測される。東部

では野中郷を本貫とする船氏と同族の葛井・津氏が，南部では村山・狭山が狭山郷，菅生が菅生郷の居住に比定されよう。中部では太井遺跡の項で述べたように，丹比連と丹比公が少なくとも6～8世紀代に黒山地域を中心として居住していたことが推測され[62]，やはり黒山郷を本貫とする秦氏も考慮される[63]。

なお河内画師は天平勝宝9年（757）の記事により丹比郡土師郷にいたことが記されているが，その地については反正天皇の時期の土師村の伝承と字名により松原市立部から上田町付近に比定する考えと，丹比郡の南西端で大鳥郡に接する日置荘周辺に比定する説がある[64]。

一方「和名類聚鈔」によれば，この地域には依羅・黒山・野中・丹上・三宅・八下・田邑・菅生・丹下・土師・狭山の11郷があり，西琳寺縁起所引の天平15年帳（743？）には「丹比郡余戸郷」がみえる。図19はこれらの郷と氏族および寺社[65]の大略の位置関係を示したものであるが，羽曳野丘陵を東へ越える東部地区を直接小論と関わりをもたないために省けば，律令期におけるその中心は，狭山・黒山と長尾街道周辺および北部に集約されることになる。

図19　古代郷と氏族の分布

図20　平安時代以降の荘園・寺・城などの分布

平安時代にはいり丹比郡は丹北・丹南・八下の3郡にわかれる。その正確な年代は不明であるが，承平年間（931～937）成立の「和名類聚鈔」では丹比郡であり，延久4年（1072）の太政官牒に「丹北郡」「八上郡」があらわれている。それぞれ丹北郡は依羅・三宅・田邑・丹下，丹南郡は黒山・狭山・菅生・丹上・野中，八上郡は八下・土師または余戸郷から構成されていた説もある。[66] なお「天保郷帳」によれば八上郡には長曽根・金田・野遠・南花田・川合・中村・小寺・西大饗・野尻・菩提・石原・東大饗の各村が含まれていた。

さて，平安時代以降の村落の状況を復原する手がかりとしては，荘園・寺院に加えて金石文に記された鋳物師の存在がある。荘園は北から矢田・長原・大堀・（高木）[67]・羽咋・長曽祢・松原・会賀牧・金田・田井・大富・日置・高松・菅生・野田・狭山が知られる。これらが全て継続したわけではないので問題はあるが，位置的な関係だけで律令期の郷および氏族とは，矢田荘が矢田部，羽咋荘が三宅・田邑・布忍，松原荘が土師？郷，長曽祢・金田荘が八下郷，日置・高松荘が

図21 寛政２（1790）年写，大保村太井村今井村丹南村立会絵図より部分
（東京都立中央図書館蔵「加賀文庫」よりトレース）

土師？・余戸郷，田井荘が黒山郷，菅生・狭山・野田荘が菅生・狭山郷などに対比される。おおむね西部から南部にかけては郷の分割をみせる新たな領域の出現が，中部から北では前記の状況に加えて大型の荘による古代郷の取り込みがおこなわれた状況がうかがわれる。当然開発の過程が異なっていたことを一因と予測できるものであり，それが村落の形態と構造にどのような影響をおよぼしたか問題となる。

ところで鎌倉期を中心とした有力な荘園としては，広隆寺領の松原荘，浄金剛院領の大富荘，興福寺領の日置荘，石清水八幡宮領の田井荘があげられる。これらの荘園と律令期の郷・氏族の配置との関係は，比定地が問題となっている土師郷と日置荘の対応以外は少なく，一方大富荘は鋳物師村とされる「大保千軒」[68]に，日置荘は言うまでもなく「日置荘鋳物師」に比定され，田井荘は野遠郷・大饗郷・黒山郷[69]・同郷河辺里とともに[70]真福寺遺跡を領域内に含むなど，鋳物師との

関連の強いものとなっている。荘園と村落の分離についてここで繰り返すまでもない[71]が，日置荘鋳物師のあり方を前提とすれば，田井荘についても比較的強い村落間結合が予想できるのであろう[72]か。

また香川県長勝寺の鐘銘から，建治元年(1275)の段階で黒山郷は上下二村に分かれていたことがわかっている。この2村がおおむね近世の下・上黒山の集落に対応するものであることは否定できないであろうが，それを前提とした場合，野遠・大饗・花田・長曽祢・金田など近世村落と共通する地名が13世紀の段階でみられることは，この段階でこの地域の開発が近世的景観に近づいたことを示すのであろうか。ここへきて，コンパクトに集村化した近世村落とは明らかに異なった構造と位置を示していた，13世紀代の集落遺跡が再び問題となってくるのである。

図22　近代の村と道（明治18年測量図から）

図23　近代村落のネットワーク

（3） 考古学的条件

以上，地理的条件により村落と耕地の立地を検討し，文献史料から村落配置の変遷を通観してみた。おそらく開発の異なった過程を原因とする，律令期から中世への村落の変化の違い，中世村落と近世村落の景観の比較に対する問題など，特にこの狭い地域においてすら村落の変遷と景観が一元的ではなかった状況を抽出してきたつもりである。そこで次に考古学データが示す状況から，集落と村落の個別性に注目して検討してみたい。

おおむね丹比郡に対応するこの地域（図24）で確認されている遺跡は124カ所を数え，羽曳野丘陵の末端にあたる高位段丘を除き全域に分布する。旧石器時代では南花田遺跡（5）で国府型ナイフ形石器とともに住居址の可能性がある竪穴状遺構を検出し，太井遺跡(46)では瀬戸内技法を伴わないものの同時期と推定される包含層が確認されている。縄文～弥生時代の遺跡はほとんどが包含層であり，南花田・丹上（35）・小角田（100）・太井遺跡で有茎尖頭器，丹上遺跡で石鏃・

図24 遺跡分布図

表1　遺跡地名表

図25 丹南の遺跡変遷

石匙・石包丁，真福寺遺跡(47)で石鏃・弥生後期土器などが検出されている。

古墳時代は，河内大塚山古墳(17)と黒姫山古墳(50)およびその周辺の小古墳群，須恵器などの生産遺跡および集落に大きく分けられる。このうち当該地域の西南部は須恵器生産の拠点となった陶器山丘陵の北端部にあたり，日置荘西町窯跡群(44)から埴輪窯が，日置荘遺跡(45)から須恵器窯も検出されている。弥生時代までの遺跡が当該地域の北半部を中心としていたのに対して，古墳時代以降はほとんど全域での分布をみせる。ただし分布の細部によれば古墳時代の集落は，古墳と生産遺跡を除いた当該地域の北半部を中心としており，基本的な環境は弥生時代以前とあまり変わらなかったのかもしれない。

これに対し7世紀以降の遺跡の分布は，西南部地域が須恵器生産の衰退により減少し，代わって当該地域の中央に位置する大座間池以南で集落遺跡が確認されるようになる。平尾遺跡(55)などの大規模な遺跡がこの地区に営まれる背景として，狭山池の築造との関わりが直接的にうかがわれるところである。9・10世紀を中心とする平安時代の状況も基本的には奈良時代と変わらない。

一方中世の遺跡分布は西除川左岸における飛躍的な遺跡の増加により特徴づけられる。これらの遺跡はほとんどが集落遺跡であり，類似した丘陵上地形にあるため遺物散布地の場合でもそこが村落を構成する領域の一部であることは間違いない。したがって単純に考えれば，平安時代から中世に移る段階で集落または村落が増加したことが推測される[(73)]。集落の一般的な成長は，原理的に生産条件の充実を前提とする。その意味で古墳時代から，律令期への変化に対する背景説明

として，先に狭山池の築造と灌漑域の拡大を指摘したが，それを前提とするならば，平安時代の段階までは，西除川左岸の灌漑が十分に機能していなかったことになる。

本章第1項で水利条件を整理したが，逆言すれば，皿池に先行する谷池のうち，西除川左岸を代表とする主な谷池は築造時期が平安後期以前には遡らないことになる。また村落および集落の拡散的再編成という意味で，その状況は文献史的条件でみられた律令期から中世への村落の配置の変遷に対比されるものとも考える。

図26　数量化分析の基準座標と遺跡の分布
（斜線は川・池）

このように丹比郡全域を対象とした村落の大略の動向は，地理・文献・考古の整理を通して述べることができそうであるが，このままでは村落個々の事情について検討を加えることができない。その理由の一つは遺跡分析の限界にある。本来複数の性格・歴史的事象を含んでいる各遺跡に対して，それらを質的にも量的にも共通にあつかうのは問題があろう。さらにその遺跡を評価するデータが調査面積と地点により異なっているため，比較はより曖昧なものとなってしまう。

そこで本項では，条里地割を遺す当該地域の特徴を反映すべく，遺跡単位ではなく1町（109m）四方を単位とした調査地点単位でデータを集積し，さらに検出された遺構に係数を付与することによって[74]，その調査地点に質的強弱をつけることとした[75]。また分析範囲も，より鋳物師村落との関わりの深い地域に限定した(図24)。なお分析の方眼と遺跡・池・川の関係を図26に示している。

図27～29に示したように，調査地点の分析は7から16世紀までをおおむね1世紀単位でおこなったが，高いポイントを示す地点の配置は，大きく4時期に分けられる変遷をみせる。第1期は7～10世紀である。西除川左岸北半部を除き，遺跡が点在的に配置される状況を示す。時期により同一地点でもポイントの増減のみられる場合もあるが，全体としては類似した遺跡の配置を示している。おそらく平尾遺跡のような特に政治的な色彩を強く指摘される集落[76]以外は，基本的に

図27　調査地点定量分析(1)

図28　調査地点定量分析(2)

図29　調査地点定量分析(3)

は継続したものと考えられ，しかも一定量以上を示す地点のポイントはおおむね平均的であって，遺跡間の格差はそれほどみられない。

第２期は11・12世紀である。遺跡の配置に関しては，西除川左岸の全域で点的配置がみられ，一方で右岸南半部では遺跡が失われる。新しい集落の出現と既存の集落の断絶による変革期である。また先の広域分析で述べた中世における西除川左岸の開発が，より詳細には11世紀を境界としていることがわかる。ただし遺跡のポイントは第１期同様にあまり高くなく，それらが孤立的で散在的である点も前代と同様な傾向と言える。

第３期は13～15世紀である。当該地域の全域で遺跡の分布が確認される。前代にみられなかった西除川右岸南半部においても遺跡の分布が復活する。ただし第１期の集落が原則として条里地割と対応する関係にあったのに対して，この時期の集落は日置荘遺跡などその規格に準じたものと，真福寺遺跡などその規格と関係の少ない景観を示すものがある。そして西除川右岸に復活した集落は後者に属する。なお遺跡のポイントは全般に高く，配置も面的で連続的である。

第４期は16世紀である。おそらくこの時期の後半代からは明らかに近世村落と重複するものと考えられ，得られる情報が少なくなっている。

以上を集約して図31を提示したが，これを元に集落の移動と村落の多様なあり方を整理して，本章のまとめにかえたい。(77)

図30　集落の変遷

（1・2：太井遺跡，3・9：観音寺遺跡，4～7・10～12：日置荘遺跡，8：南花田遺跡）

既に述べたように，丹南の歴史的環境は連続して5世紀まで遡ることが知られている。したがって，中世村落の原景観の一部は古代郷に求めることが可能であると考えられる。古代郷については，前項で現在の地名からの位置的な類推と関連氏族の配置を紹介したが，その領域については，問題が残されたままである。

さて近代村落の範囲をみると，その境界は基本的に条里地割を基準としていることが知られる(図22)。里の区画はともかく坪区画が後世の村落境界と高い整合性を示している点は既に指摘されているところでもある[78]が，中でも日置荘3村（原寺・北・西）を合わせた領域は，地形的制約を受ける南西辺を除き，西辺の一部から北・東および南辺の一部まで，連続した条里線を境界とし，領域は方形の形態を示している。もちろん段丘を斜めに区切る金田，石原，中村などの村の領域もあるが，条里地割を拡大した方形の形態を村落の領域としているものは，他に黒山，野遠などが該当し，丹上・丹南または立部・岡をあわせた領域などは，日置荘の3村同様に，共通す

図31　調査地点定量分析の集成（パーセントは地点数の比率）

図32　推定される村落の移動

る条里線をあわせて方形の領域形態を示している。

一方この地域における古代郷は丹上，黒山，菅生，余戸，八下，土師であり，土師・八下郷以外はその位置が推測されている。いま仮に前記の領域を比べると，丹上・黒山・余戸郷は，それぞれ先の領域に含まれて対応関係になる。またこれらの領域と条里地割のずれを単位とした領域を比較すると(図18)，前者の領域が細分される場合もあるが，おおむね対応関係にあるものと考えられる。したがってこれらの領域は開発または設置の単位としても評価される可能性があり，その結果，古代の丹上・黒山・余戸郷は，いわゆる条里村落として，方形で復原される領域をその範囲としていたと仮定されるものである。[79] そしてこれを前提として八下・土師郷を考えると，位置的には前者が野遠周辺に，後者は日置荘または立部周辺に比定されているが，条里地割を残す点では日置荘に対比される可能性が強いものと考える。

以下，仮定した古代郷の領域を基にして，中世村落への変貌のいくつかのパターンを郷毎に説明していきたい。

丹上郷では丹上遺跡で8～10世紀の建物群が検出されている。[80] このうち8世紀の建物群は，竹之内街道に接して官衙的配置[81]を示すもの，および散居的建物であり，これらの建物群が当郷の中核となる集落のひとつである可能性は高いものと思われる。9世紀の資料がみられないなど村落の変遷は断続的であるが，10世紀においては数棟からなる建物群が検出されている。そして11世紀以降は集落の存在が全く失われてしまう。

ところで村落の発展的変遷の景観は，集落の移動と構造の変化によって表現され，このうち集落の主な移動原理は，生産条件の向上と，古代「郷制下の班田農民の成長は郷域内までという限界性[82]」を前提としている。したがって丹上遺跡調査地内における11世紀以降の集落の消滅は，地理的条件とあわせて，灌漑条件の低下により説明され，逆に集落の移動先は水利条件によって求めることができるはずとなる。

そこで10世紀まで断続的に継続した丹上集落の移動先として真福寺を仮定したが，それは同村が新しい村落という意味で，その領域および発掘された建物が条里地割の影響を受けないこと，立地が水利条件の有利な沖積段丘に接する中位段丘の縁辺にあたることなどを理由としている。

黒山郷では8世紀から現代に至る段階で，集落は同郷内で顕著な移動をみせない。これは灌漑条件の視点でみれば，8世紀段階で既に開発と水利が一定の段階に達していたことを示すものであり，それは当郷の寺社および発掘成果から得られる歴史的環境とも矛盾しない。

日置荘と立部では8から16世紀まで連続した集落を復原することができる。条里地割との関係において両者は極めて対照的な関係にあるが，集落の移動に関しては，いずれも水利の上流から下流へむかう傾向で集落が拡散または分割されている。

このように中世丹南の村落は，条里および開発と灌漑条件などとの関わりによって，村落と集落の移動と形態に「丹上型」・「黒山型」・「立部型」・「日置荘型」などといった異なった景観が指摘できそうである。

そしてその変遷としては，10世紀までは古代郷を前提として拠点的な疎塊村が点在する中で，小村および孤立荘宅が点在する。11・12世紀代は，西除川左岸の開発に代表される灌漑条件の変更により，集落は移動・拡散する。ただし集落の単位自体は前代よりあまり拡大せず，その景観はやはり小村の域をでないものと考える。

13世紀以降は，おおむね全域において近世の村落配置の原型となる開発と集落の分布がみられた可能性が高く，集落の単位も大きなものとなる[83]。おそらくこれが集村化の動向[84]と対比される現象になるものと考えるが，溝で区画された屋敷地とその連続構造[85]がみられるのもこの時期以降となっている。そしておおむね16世紀後半から，コンパクトにまとまった近世村落の形態が形成されることになるが，その背景には皿池の築造による新たな開発との関わりが当然指摘されるところである。

小論の目途のひとつは，中世丹南における村落の多様なあり方を同時代的に復原することにあった。そのために主に地理的条件により近世的要素を排除し，文献史的条件により古代郷と近代村落の間をつなぐ史料を整理し，考古学的条件によりこれらの整理を現地に対応させる作業をおこなってきた[86]。そしてその結果，これまでに少なくとも4類に分けられる村落とその変遷を示すことができたと考える。しかしこれらは主に灌漑条件による現象的な説明であって，本来その様々な変化は，たとえば灌漑条件の変更と対峙した場合でも，それは村落構成員の多様な社会的存在のあり方に起因しているはずである。そこでここでは，その原因のひとつの姿として，鋳造工人に代表される職能集落を演繹的な前提として論を進めることにしたい。

3　河内鋳物師の存在形態

（1）鋳造遺跡の特質

多様な景観をもって復原される丹南の中世村落に対し，その中のどれが鋳造に関わった職能民の村落であるのか，その手がかりとなるのが鋳造作業の痕跡を残した遺跡の調査であることは言うまでもない。そこで本章では最初に，一般に言われる鋳造遺跡を整理して，鋳造工房または鋳造集落に共通の要素を抽出したいと考える。

ところでこれまでは，調査された鋳造遺跡のほとんどが，「鋳物師の一時的な出仕事をするための仕事場（吹場と称される）[87]」であったと推定されることもあり，その構造的な分析は，杉山洋氏に代表される寺院関係に限定した場面でおこなわれることが多かった[88]。一方鋳造遺跡研究会の成果によると奈良時代以降の鋳造遺跡は全国で96カ所（調査地点）以上を数え，さらにその調査例を増加している[89]。さらに林　純氏の整理にみるように，時代によりそれらが寺院以外に関係する場合も示されてきている[90]。

ただしそのほとんどは遺構に伴わず，遺構が確認される場合でも，それは単独で存在することが多いため，依然としてその性格と遺跡の構造を明らかにする条件は不足している。以下時代別

表2　鋳造遺跡地名表

図33　鋳造遺跡と鋳造関係遺構

に代表的な鋳造遺跡を紹介し，整理を進めていきたい。

古代では平城京右京八条一坊十四坪北区（８世紀前半[91]），山城国分寺跡（８世紀末[92]），台耕地遺跡（９世紀後半～10世紀前半[93]）などがあげられる。平城京の例ではＬ字形の塀と４×２間の建物（約30m²）で囲まれた井戸の周辺で鋳造作業がおこなわれていたとされている。検出状況としては柱穴・溝・土坑などに灰や炭化物の混入がみられ，大型で不整形な炭化物の充満した土坑，または壁面の焼けている土坑が目についたとされる。山城国分寺跡では溶解炉基底部と床面に溝の設けられている鋳造土坑およびそれを覆う４×５間の建物（約175m²）が検出されている。鋳造土坑からは瓦・土器・灰・粘土・焼土・鋳型または炉壁片が出土している。台耕地遺跡の93号住居跡は３～４の浅い掘り込みが連なった遺構で粘土に近い土が敷かれている。製錬炉に近く，鋳型が出土している。

中世では大宰府史跡第65―２次調査（11世紀[94]），日置荘（HKS-９）遺跡（13世紀[95]），平安京左京八条三坊（14・15世紀[96]），古市遺跡86―１（15世紀後半[97]），軽野正境遺跡（16世紀[98]）などがあげられる。大宰府では焼土とともに保土穴が７個「コ」字状に並ぶ遺構が検出されている。直径30cm，深さ16cmを測り壁と周囲に被熱痕跡がみられ，内部から銅滓が出土している。またこれらの遺構を覆う形で３×５間の建物（約50m²）が建つ。さらに周辺の溝・土坑から炭・銅滓・鋳型・坩堝・鞴羽口が出土している。日置荘遺跡では３×4.5×0.4mで底部に柱跡をもつ不定型土坑，１辺６m以上で深さ0.5mを測り，ゆるやかな壁面を呈する不定型土坑などが検出され，13世紀の土器・陶磁器類とともに礫の集積・滓・鋳型が出土している。平安京では炉床・石組遺構・礫集積土坑などが検出されている。古市遺跡では黄色粘土が貼られた面で，多量の鉄滓とともに３基の炉基底部が検出された。また隣接して2.7×2.4mの範囲で粘土敷遺構が検出され，多量の鉄滓・羽口・炭を含む１辺２～３mを超える方形土坑も確認された。軽野正境遺跡では５×３mと１辺２m程度の不定型土坑が隣接・重複して14基以上検出されている。

近世では堺環濠都市（SKT153）遺跡（16世紀末～17世紀中葉[99]），北花田口（KHG-２）遺跡（17世紀後半～18世紀[100]）などがあげられる。堺環濠都市遺跡では２×１間の小規模な建物と，隣接する土坑から多量の鋳型・羽口・炭・焼土が出土した。建物に炉を設置し，土坑へ湯を流し込んだものとされる。北花田遺跡では板囲いの粘土溜施設，鋳型集積，および4.6×1.8mを測る長方形土坑が検出され，炭・焼土・鋳造関連遺物が出土している。

なお比較的広範囲で中世の鋳造遺跡が調査された例として，福岡県の鉾ノ浦遺跡（13世紀後半～14世紀前半[101]）と埼玉県の金井遺跡（13・14世紀[102]）が知られ，前者では鋳造土坑・工作用土坑・廃棄土坑・炉・鞴などといった遺構の内容が分析されている。

以上より表２とあわせてこれらの鋳造遺跡に共通する遺構の状態を整理すると，被熱痕跡とその形状などで炉跡と推定される遺構あるいは，床面に溝状などの施設をもつ鋳造土坑以外で，まず最初に方形または不定型土坑の存在が指摘できる。規模はおおむね１辺３m以下程度と５m程度以上に分けられ，後者の場合は溝状になる場合もある。真福寺遺跡，台耕地遺跡，軽野正境遺

図34　鋳造集落遺跡

跡などの例によれば，それらは一部重複しながら拡張した状況で検出されており，後者は前者の一部が複合したものである可能性も考えられる。その性格については，大半が廃棄土坑または土採り土坑とされているが，土坑形成のプロセスと包含内容の検討によってその本来の機能が整理されるべきであろう。

なお，真福寺遺跡の2号土坑の西に位置する方形土坑，中村遺跡の方形タイプ[103]，鉾ノ浦遺跡のSK601など方形で浅い土坑のうち，炉状遺構との関係が近いものは，鞴の位置を示すものとも考

えられる。[104]

第2は礫の検出である。その状況は，不定型土坑への廃棄と地表面でみられる集積（石敷状態を含む）に分けられる。これらは炉の基底部または鞴台などに考えられている。第3は粘土溜り・粘土集積・粘土敷・粘土貼り施設などの状況である。特に室町以降で確認される場合が多く，木枠などで囲われて検出される場合もある。

一方その変遷をみると3段階の時期が考えられる。Ⅰ期は古代における基本的なありかたとされよう。平地では官または有力豪族および寺院に付属する工房としての位置にあり，一方で石川県・富山県・福島県の例にみるように山地においては少なくとも製鉄遺跡に包括されて存在する。[105]主な鋳型は獣脚など仏具である。ところが10～11世紀頃には前代同様の工房的位置づけ以外に，鋳造工人による同業村落とも言える状況が生まれ，製鉄遺跡とも分離する（Ⅱ期）。[106]この状況を前提とすれば，寺院との関係も，従属から雇用への変化といった考え方ができるかもしれない。主な鋳型は梵鐘などの仏具に鍋などの日常品が加わる。そして遅くとも16世紀には，再び城館の内部にとりこまれる形と都市民として生業を維持する形に2分する状況がうかがえる（Ⅲ期）。鋳型は農具・鍋・鏡・仏具など多様化する。

そしてこれらの状況を丹南鋳物師の動向と比べると彼らが記録にではじめるのがやはり11世紀であるが，ここではその指摘だけにとどめることにする。それでは日置荘遺跡の鋳造集落はどのように復原されるであろうか。以下，遺構と遺物のそれぞれについて整理を進める。

（2）日置荘遺跡の景観復原

1　鋳造作業と建物群について

鋳造は溶解作業と造型作業に大別される。[107]溶解作業は金属を溶解して鋳造に適する溶金を作る仕事であるが，その前段階には原材の入手，配合，分類貯蔵および燃料の入手・貯蔵作業も含まれる。溶解に用いられる炉はこしき炉とるつぼ炉があり，それぞれ朝倉秋冨[108]・五十川伸矢[109]・山本信夫[110]・杉山洋[111]氏らによって復原・検討されている。造型作業とは鋳型製作に関連する仕事である。原料とされる鋳型砂[112]の配合・分類・貯蔵・回収処理および成形とその乾燥・保管などがその内容である。これらの工程を整理して，民俗調査などによる鋳物工場の平面図と比較してみる（図35）。

児玉鋳物師屋敷図によれば，[113]溶解炉を作業の中心におき，約300m²の炭置場と荷造り場，鍬・釜・鍋などの型込め場がこれをとりまく。これ以外に別の炭倉・砂置場・型小屋および各製品置場など多くの倉庫スペースが必要とされ，面積は母屋を含めて300坪におよんだとされる。倉吉の鋳物師も同様の構造である。[114]近江の鋳物師は，[115]180m²程の工場内部に溶解炉・鋳込み場と鋳型置場などの作業スペースをもち，外に燃料・原料・砂などの倉庫と置場を持っている。これら各種の倉庫スペースの重要なことは，作業工程からも指摘できる点であり，言うまでもなく溶解炉と鋳造土坑は，面積的にはそのわずかな空間を占めるにすぎない。

図35 鋳造工場平面図
（1倉吉・註114，2近江・註115，3児玉・註113）

一方日置荘遺跡Ｉトレンチの鋳造集落であるが，前提となる共同体としての完結性を井戸に求めた場合，この建物群は１カ所の井戸によって一個の屋地と仮定できるものとされる。その範囲であるが，トレンチの東西は遺構の分布により約90mが推定でき，南北も最大領域で90m以上を想定できる。おおむね金井遺跡の遺構群範囲と近似しており，前記の鋳物師屋敷の面積にも劣らない。さてここで示される要素は，集落要素としての建物跡などと鋳造関連遺構に二分される。

建物群は溶解炉・井戸・土坑１に近い南の群と北の群に大きく二分される。復原されている建物は16棟で，少なくとも２時期に分けられるため，１時期の構成はおおむね10棟程度とされる。規模をみると，75m²程度が２棟[116]，35～40m²程度が５棟，20m²以下が９棟となり，それぞれ南北の２群に同比率で配置される。中世農村の住居規模については，伊藤鄭爾[117]氏が伊勢国泊浦村江向村（1310）で12坪以下の住居が82％を占めることから，箱木家の規模（６×４間）を上位におき，さらそれが山城国植松荘琳阿弥(1394)・備中国新見荘地頭方奈良殿（1464）などの資料により地侍層にあたることを述べている[118]。また河内国の在地領主である水走氏は私領田畠を100町近く有していたが，建長４年（1252）の処分目録による屋敷をみると，６間１面の寝殿・７間の廊・惣門・中門７間・３間の土屋・３間１面の厩屋・５間の倉・３間の倉・６間の雑屋などから構成されている[119]。やはり中心建物となる寝殿が24～30坪程度と推定されるものである[120]。

一方考古学資料によれば，大阪府下における13世紀代の建物群では幅数m以上の溝を伴う場合以外は，最大建物の規模は80数m²以下を示し[121]，近江の例でも４×５・６間の建物を最大として

いる。[122] さらに金井遺跡，新潟県寺前遺跡[123]の中心建物もほぼ同規模を示している。したがってこれらの状況から，日置荘遺跡の建物群が少なくともこの時代の一部の領主層またはそれに次ぐ階層を示している可能性は高いものと言えよう。ただし日置荘遺跡の場合建物の数は満たしているものの，中心建物以外が水走氏の屋敷同様に展開するかどうかは難しい。むしろこの場合は各種の倉庫スペースに充てられるべきであろうが，この点は次の鋳造関連遺構との位置関係で問題となってくる。

次に鋳造関連遺構についてみる。関係する遺構は，炉基底部が1カ所，焼土・炭を埋土とした土坑が2カ所，炭・スラグなどを埋土とした土坑が1カ所であり，その分布は南に偏る。残存する炉は1基であるが，関係する土坑はすべて炉と離れた位置にあり，時期を異なる炉がさらに南側に存在するものと考える。土坑1は底部・平面形共に不整形であるが，規格性をもって連続してつくられたものであるため，非生産的な廃棄土坑などではなく，鋳型を設置した鋳造土坑であると考える。さらにその規模が小さいため，製品も鍋程度の小型品と推定される。

そして問題は倉庫スペースとの関係である。既にみてきたように中心建物の推定と鋳造施設の偏在状況から，北群に生活空間，南群に作業空間があった蓋然性は高い。また柱穴の分布をみれば，北群が広い範囲にかかわらず建物部分に集中するのに対し，南群は狭い範囲に高い密度で分布し，さらに面的に広がっている状況がうかがわれる。これは南群の建て替えまたは増改築が北群より多くおこなわれたことを示すものと考えられるが，それは南群の建物が簡易であったか，収納物の量が流動的であった事情に反映されるものと推測される。北群の建物は当然これに対置される特徴を有することになり，その結果北群が生活域，南群は作業場として複数の倉庫が鋳造遺構をとりまいていた可能性を指摘できるものと考える。

さてこのように，中世村落の中で2割の階層に位置づけられる日置荘遺跡Ⅰトレンチ集落の構成員はどのようなものであろう。その前提となる一般論としての中世村落の構成員をみると，第1には「名主」身分を持ち「親類・下人」による複合的労働力構成をもつ有力農民，第2に「名主」身分をもたないまたは荘官地頭に私的に隷属する弱小農民，第3に定住性の希薄な間人身分がみられ，これに下人身分が加わる。[124] また10世紀末～11世紀初頭以降は特に名主層を中心とした「住人」身分が中世村落の現実的な構成員を示したものとされている。[125] 一方いわゆる日置荘鋳物師の場合，所当を興福寺に進めながら勅事・院事等の課役免除をかちとる運動をしている点で，名主あるいは百姓階層であり，[126] 小百姓・作人なども伴っていたとされる。[127] また，労働組織としては血縁的・同族的結合が強く，大工・小工などからなる階層をもっていた点も特徴とされる。[128]

ところで板倉氏によれば，鋳造工場を運営するに際して，技術者としては，普段は頭領以外に2～3人で足りるが，鋳込みに際しては，頭領・炭焚・栓留・湯入掛・手伝などの鋳物労働者と最低5人の送風労働者を合わせた10～30人の規模が必要とされている。[129] 日置荘遺跡の鋳造集落の場合，作業規模として前記児玉鋳物師の工場に対比されるまでもないが，工程自体は同様であるため，それにあわせた作業人数は必要なものとなる。おそらく名主階層であり大工または小工で

ある鋳造工人を家長として，その一族および小百姓または下人などが，専属的ではないにしても鋳造の各種工程に携わったものであろう。その人数を類推することは難しいが，建物群のうち30数m²規模をもつ住居が5棟あるため[130]，1時期当り3家族程度を，家長以外の構成員とみることができる可能性がある。

2　出土遺物について

日置荘遺跡から出土した遺物は，在地の土師器・瓦器製品をはじめとして中国製陶磁器，国産陶器など多岐にわたる。このなかで遺跡の特徴をより示すのは搬入資料である。もっとも鎌倉期の搬入品についてみれば，傾向の中心は擂鉢と甕が東播磨窯，碗・皿が中国製陶磁器であり，基本的な組合せは西日本の中世遺跡一般の状況を示していると言える。ところがこの遺跡の場合，それ以外で西日本の中世遺跡であまりみられない製品も出土しているのである。

図36は上記の東播磨窯製品と中国製小型品を除き，日置荘遺跡の各トレンチから出土した主な搬入製品である。なお在地製品として17の河内・和泉型瓦器釜を示しておいた。1～5はいずれも常滑窯の擂鉢と考えられる。それぞれ1は12世紀後半[131]，2が13世紀後半，3～5は14世紀前半に比定される[132]。6・7は東濃系の瓷器系皿・碗で7は白土原1号窯期にあたり，やはり13世紀後葉に比定される[133]。8～12は古瀬戸灰釉の製品である。8は丸皿，6は手付片口，11は折縁皿，12

図36　日置荘・太井遺跡出土遺物（1・3は太井遺跡）

図37　日置荘遺跡Ⅰトレンチ出土遺物

は卸皿である。時期は9・11が14世紀代でそれ以外はおおむね15世紀代に比定される。[134] 13・14は中国製の白磁四耳壺（12世紀）と建盞である。15は備前窯の擂鉢(14世紀)，16は常滑窯の甕（12世紀後半）である。

中世前期における国産陶器の幹線となる流通に関しては，北東日本海域の珠洲窯，東日本および太平洋岸を範囲とする常滑窯，西日本の東播磨および備前窯製品に三分され，それらが各地の遺跡でそれぞれ特徴的な陶磁器組成を示すことが知られている。[135]

この中にあって常滑窯甕以外の東海系の製品は，16世紀後半に至るまで一般に西日本の遺跡ではあまりみることがない。もっとも高石市の伽羅橋遺跡[136]・堺市の菱木下遺跡[137]などではこれらの出土が知られており，海上路による流通の拠点と鎌倉期に成立した特定の大型集落には搬入されたものと思われる。特に15世紀代の瀬戸窯製品については大聖寺[138]との関連がうかがわれるものであり，それについても菱木下遺跡に対する釈尊寺の関係と対応する。しかしいずれにしてもこれらの製品が河内・和泉地域の遺跡において出土するのは希であり，[139] 特定的なものと言える。同様な傾向は中国製陶磁器についてもみられ，白磁四耳壺が西日本の中世遺跡で出土する比率は1割程度となっている。[140]

加えて注意されるのは，瀬戸内東部系の須恵器甕の存在である（図37）。1は外面に格子叩きを施した壺の肩部である。胎土はやや砂粒を含み，白色を呈する。頸部の屈曲が強すぎる観はあるが，讃岐国の十瓶山窯の製品と推定される。2は外面に斜方向の平行条線叩きを施した壺である。胎土は緻密で色調は灰色を呈する。調整は内面がナデ，外面は叩きの後にナデ調整が施されている。また底部外面には糸切り状の痕跡が残る。平底で外面に斜方向の長い単位の叩きを施した製品はやはり十瓶山窯の特徴と共通するが，胎土・外面の叩き調整・底部際外面の外反する形態などは上記の特徴とは相入れず，[141] むしろ岡山側の胎土に類似した特徴も考えられ，[142] 鎌山窯である可能性も指摘されている。[143]

これらの製品の中で，十瓶山窯の製品は経外容器などとして比較的広域の流通を示すものであるが，[144] 播磨を除く瀬戸内東部北岸の製品は，この時期あまりみることがない。

つまり日置荘遺跡の周辺を土器・陶磁器の組成からみると，在地土器と東播磨窯あるいは中国製小型品といった通有な製品以外に，特に東海および瀬戸内東部との流通を個別的にもっていたことになる。中国製品の搬入についても一般の集落以上のルートをもっていた可能性が指摘でき

図38　梵鐘の撞座と軒丸瓦の文様
（スケール任意，中段右端を除く上２段の番号は坪井1970準拠，１～３・６は日置荘遺跡，
４は鉾ノ浦遺跡，５は寺前遺跡（鋳型）出土）

る。

ところで日置荘遺跡の出土遺物を特徴づけるもう一つの点に瓦の大量出土がある。この遺跡に近接する寺院としては，平安時代後期の萩原寺の記録があるが，それは中世の段階で６カ寺に分れ，付近では大聖寺が記録にみられる。[145] 一方中世河内鋳物師の作品としてもっとも数の多いのが梵鐘である。その梵鐘に施された種々の装飾の中で，撞座もさまざまなバリエーションをもつが，坪井良平氏によれば，河内を本貫地とする工人の梵鐘は，八葉の蓮華文で「闊弁四葉を二つ重ねて，上の四葉は全形を現し，下の四葉はその間に覗いてみえる配置になる」撞座を特徴のひとつとしている。[146]

一方この文様は軒丸瓦の瓦当文様と共通するモチーフが使われており，中世前期までの段階では特にその類似が明らかである。日置荘遺跡から出土した軒瓦のうち，中央の調査区ではやはり間弁をモチーフとした軒丸瓦がみられ，東部のトレンチから同様に十字に配した複弁で間弁をもつ瓦および，その変形と思われる文様の瓦が出土し，後者については，鉾ノ浦遺跡出土の撞座鋳型と近似している。[147] 他地域での鋳造遺跡と寺院の関係を調査するにいたっていないが，消去法的であってもその因果関係は評価の対象となるのではないだろうか。

3　丹南の鋳造村落における日置荘遺跡の位置づけ

以上，鋳造遺跡の特徴を説明するための要素を整理する中で，その一端にある日置荘遺跡Ｉトレンチの状況を遺構・遺物の両面で整理してきた。

ところで丹南鋳物師の特質については既に豊田　武氏以来の文献による研究成果があり，[148] 当初に述べたように網野・河音両氏によってその現段階での評価がまとめられている。[149] それによれば丹南の鋳物師は，永万元年（1165）に蔵人所小舎人惟宗兼宗によって建立され，蔵人所燈炉以下

図39　鋳造関連の遺跡と記録

鉄器物供御人の番頭という地位を保証された日置荘住人の鋳物師（右方燈爐作手）と，仁安3年（1168）に広階忠光が蔵人所から「惣官職」に補任された蔵人所「燈呂貢御人」（左方燈爐作手・回船鋳物師）および，やがて左方に融合する東大寺鋳物師に分かれる。(150)

前者は興福寺領の日置荘住人として，身分的には名主層または百姓であり，小百姓・作人をともないながら，『新猿楽記』にみえる「河内鍋」などを鋳造し，「鉄売買」のために和泉・河内・京中をはじめ諸国七造を往反する商工民であった。その本拠地は日置荘以外に金田・長曽根などであり，長門国もその勢力下にあった。そしてその中心は丹治姓鋳物師であったと推定されている。また関東との結び付きもあったと考えられている。

一方後者は当初「縁に触れて」諸国に散在する「子孫」などとして，「同族的」な関係で前者の統制下におかれようとしていたが，「日吉社聖真子神人兼燈呂供御人並殿下御細工等」として勢

力を強め，やがて東大寺鋳物師と鎮西鋳物師もその組織下に入れ，畿内を中心に堺津を荷上地とすることによって，瀬戸内から九州にいたる広範囲な活動で右方を圧倒していく。記録に現れる番頭は，草部・布忍・氷・広階・紀・山河・橘・膳であるが，彼らは前者と異なり給免田を与えられず，五畿七道諸国を遍歴・交易するいわば武装商工集団であって，その惣官は荘官級の武士であったと考えられている。また草部姓を中心とする東大寺鋳物師は，特に重源と密接な関係をもち，それにより備前国の畠地子の中から給分を与えられる立場となり，後年備前・備後を重要な活動舞台としていく。前者が徒歩で鍋を売り歩いたのに対し，後者は騎馬で各地の権門寺社に出張し，梵鐘・燈爐などをつくったとも考えられている。

図40 八下遺跡出土獣脚型（幅6.5〜10.5cm，写真からのトレース）

これに対して日置荘遺跡および丹南の中世村落の状況を比べる。最初に日置荘遺跡の階層的位置づけとしては，1カ所の井戸による完結性と中心建物の規模と形態および白磁四耳壺の出土から，それが中世集落の2割以下の比率を占める位置にあり，少なくとも名主層に比定される可能性は高い。ついで農耕的な面についてみると，当遺跡周辺の地形は条里地割の残存する景観を基盤として基本的に平坦な台地上にあたるが，発掘調査によれば浅い埋没谷が部分的に認められ，その間を条里地割に対応した12・13世紀の集落が点在することになる（図41）。発掘データからは痕跡を確認するにいたっていないが，おそらくその間に耕作地がひろがっていたものであろう。また近世の石高[151]と西除川に対する水利の関係[152]もあわせて，当地における耕作条件は中世以前から整っていたものとも考えられる。

鋳造作業としては，今回はその具体的な規模を算出することができなかったが，継続的ではあるがおそらくそれほど大規模なものではなかったであろう。遍歴と交易に関しては，東海と瀬戸内東部との特異な関係を指摘できる。前者は関東とのつながりを，後者は原材である「打鉄」の主要産地である中国地方との関わりをうかがわせるものである。また鉾ノ浦遺跡出土の撞座文様と日置荘遺跡出土瓦文様の共通性は，丹南鋳物師とあるいは鎮西鋳物師の関係を示すものかもしれない。

これらの要件から日置荘遺跡の鋳造集落をみると，多くの点で日置荘鋳物師の特徴に対応するものと考える。それではいわゆる回船鋳物師との関係はどうであろうか。文献では番頭の氏名からある程度その居住地が推定できるが，右方と対象的な関係にあることを前提にできるならば，小論で整理してきた中世丹南の中世村落の構造に照らして，先に述べた右方鋳物師としての日置荘遺跡の特徴に対比される状況を選択・復原する方法が使えることになる。

すなわち農耕的基盤において必ずしも十分である必要はなく，集落は分散的で，出土する資料は西日本から九州を含めた地域の傾向を強く持つ。鉄産地としての中国地方との関係と，作業規

表3　河内鋳物師の氏別変遷表

模については特に異なる点を強調できないであろうが，回船を中心としている以上作業は断続的または短期間のものとなるはずである。ただしいわゆる日置荘鋳物師による蔵人所供御人の「建立」に対して，即応的に対処しているところから，彼らも独立した存在であったことが推測され，その意味で建物規模なども異なる点は少ない可能性がある。

さて前章で村落の構造と変遷として「丹上型」「黒山型」「立部型」「日置荘型」といった4類型を示したが[153]，「日置荘型」の対極におかれるのが「丹上型」であり，具体的には真福寺遺跡となる。その状況を振り返れば，鋳造遺構は大型で土坑の形成過程から複数回の使用が指摘できるが，遺跡としての存続期間は短く，作業は殆ど一時期におこなわれたものと言える。村落は灌漑条件の向上を求めて丹上郷内を移動してきたものと推定され，条里地割に規制されない再開発によって，集落と耕地が孤立荘宅的または疎塊村的に散在する。また出土遺物は西日本の遺跡で一般的な組成を示している。

これらの状況からいわゆる回船鋳物師の特徴と比較するには条件が不足するものであるが，鋳造作業が一時的である点，集落の構造も含めて鋳造土坑以外の施設が乏しい点は，遺跡の住人があまり定住的ではなかったことを示すものであろうし，家屋の散在的配置は，各々の独立的性格

図41　日置荘遺跡の景観復原

を示すものとも言える。そしてその村落が条里地割を革新的に再開発した環境にある点は，伝統的な日置荘鋳物師の「子孫」として統制されようとしていた，古代郷から分解した新興の村落民の姿を推測できるものかもしれない。(154)

それではこの２遺跡を代表として示される鋳物師村落は丹南においてどのような配置を示していたのであろうか。文献・考古・字名によって推定される位置関係を図39に示した。字名の成立時期が均一的でない場合も考えられるが，西除川をはさんだ日置荘周辺と真福寺遺跡を含めた大保から今井の２ヵ所に分布の集合が認められる。文献によれば，後者の集合に関連する鋳物師は広階に代表されるいわゆる左方であり，その分布は西除川を下って野遠・岡・新堂から布忍方面へ広がっている。(155)一方右方は金田・長曽根方面ということで前記の分布と交差しない日置荘から北西の地域にあたる。右方鋳物師と左方鋳物師は，村落の位置的にも分離していた可能性がある。

そしてこれらの地理的景観であるが，第１にはいずれも条里地割の残存していない部分にあたることが指摘できる。また右方の金田方面が谷地形が多い条件からも含めて面的にひろがっているのに対し，左方の分布は条里地割の残存率の高い平坦面にあって，限られた谷地形を有効に利用した形で，西除川に近く条里残存の少ない地域に符合している。すなわち鋳物師の痕跡・記録が丹南の各地に分散してみえる状況の内部で，その村落は，特に左方においては前記の説明と対応するかたちで，条里地割の再開発地区に比定される可能性が高いものと評価されることになる。

図42　河内国八上郡野遠村領内絵図(上)，天保14年（1843）(写)丹南郡原寺村絵図(下)部分
(東京都立中央図書館蔵「加賀文庫」よりトレース)

そして右方の金田地区についても，日置荘の二次的村落と比定することにより，日置荘以外で条里地割の残存する地域が，逆に一般の農耕村落の基盤として再評価できる可能性を指摘したいと考えている。

加えて11世紀に日置荘鋳物師が記録に出現する背景については，律令行政村落の基本たる50戸1里制が解体し，中世的郡郷制が登場する10世紀中葉の時期[156]，および鋳造遺跡の変遷にみた工人組織の変化期（II期）などが関連した結果を類推している。

以上蔵人所供御人の鋳物師およびいわゆる回船鋳物師の特徴と，丹南の中世村落の個別的な特徴の対比をおこなってきたが，最後に河内鋳物師の移動・交易に関する鉄鋳物と土器製品の関係

について述べたい。日常雑器としての鉄製品に関しては，遺物として確認される機会が少ないため，これまであまり取り上げられることがなかった。しかし五十川伸矢[157]・越田賢一郎[158]・菅原正明[159]・浅野晴樹[160]氏などの整理により，特に鍋についてはその普及の程度が議論され，東国と西国の状況の異なりを含めた土製品との関わりについても関心がもたれつつある[161]。また直接鉄鍋の分布を検討するまでもなく，西日本の土製鍋と東日本の土製の内耳鍋が鉄鍋を介在することにより共通の形で理解できるところから[162]，鉄鍋の一定の普及の程度は知ることが可能である。もっとも鉄鍋産地である河内・和泉をはじめとして紀伊・大和・伊勢ではその形の土製鍋がみられない，あるいは中心的位置にないという事実があり，鉄鍋模倣土鍋の存在が鉄鍋普及にどのような意味を表しているのか，興味深い問題が残る。

また鉄鍋に次ぐ日常雑器として，絵画資料などから五徳金輪が予想されるが，これは煮炊具の支脚としていわゆる土製足釜・鍋と対比される。このうち特殊品である湯釜形態の瓦器足釜を除外すれば，その分布は時期によって多少変化はあるものの，基本的に瀬戸内西部を中心としていることがわかる。ものの動きと人間の移動の因果関係の説明が難しいのは，大山崎神人の広範囲な交易からも明らかであるが[163]，少なくともこの製品は鉄製品との関係を抜きに考えることができない。そして長門・周防は古く鋳銭司がおかれ，鎌倉期から丹治姓鋳物師の存在が知られ

図43 河内鋳物師の製作品と日置荘遺跡の出土陶器および土釜・鍋の分布

ている。(164) あるいは河内鋳物師の移動と鉄製品の普及に関して説明できる要素となるかもしれない。稿を改めて考えることにしたい。

4　結　　言

近年中世を対象としたシンポジウムで，考古学と文献史研究の共業が一般化しつつある。テーマは多彩であるが，それらの基盤には工人または都市民といった非農業民の姿がある場合が多い。かつて網野善彦氏が提示した問題に応えるかたちで，いわゆる社会史的研究が注目され，やはり具体的には職能民の製作品を直接考察の対象とする場合が多い中世の考古学が，その方法を維持しながら議論できる環境になってきているのである。その意味においてこの分野に対する考古学の果たすべき役割は今後も大きいものと言える。

一方中世集落遺跡の研究は，遺物を対象とした上述の成果に対応すべく，性急なまでの研究の進展を求められた結果，中世において大多数を占めていた農耕民の集落としての一元的な考察に進まざるをえなかったと言える。確かに今までの研究成果にあるように，中世丹南における村落の発展も，原理的には農耕を軸においた耕地の開発を前提とすべきである。しかし職能民の社会的位置づけが重視される中で，特にこの地に河内鋳物師の本貫地がおかれていたことにより，中世村落研究に対する職能民からのアプローチを可能とする予測がたったのである。

小論はこの視点と，集落遺跡をより村落研究のなかに位置づける指向によって，一元的ではない村落のさまざまなあり方とその一端にあった職能村落の状況を述べてきたつもりである。なかでも伝統的な日置荘遺跡と革新的とも言える真福寺遺跡の状況が，鋳物師村落をさらに質的に分離する状況もみてきたものと考える。その意味で，一般的な農耕村落との構造的な対比を十分に果たせなかったが，この問題に関しては従前の村落研究においておこなわれてきた階層的分析にあわせて，同時代の質的分類の検討を今後の課題としたい。

同時に各地におけるさまざまな職能民のあり方を村落としての視点で検証するなかで，古代から近世にかけてみられるさまざまな変革期の構造の一端についても，今後言及できるものと考えている。

小論の作成にあたり，吉岡康暢氏，網野善彦氏をはじめとする多くの方々からご教示をいただいた。末尾であるが深く謝意を表するものである。（五十音順，敬称略）
赤熊浩一，朝岡康二，浅野晴樹，泉谷博幸，五十川伸矢，市川秀之，市本芳三，伊藤　晃，上西節雄，宇野隆夫，荻野繁春，小野久隆，小野正敏，片桐孝浩，河野通明，越田賢一郎，坂井秀弥，狭川真一，笹本正治，白神典之，鈴木康之，田嶋明人，續伸一郎，橋口定志，原田信男，久田正弘，広瀬和雄，藤田邦雄，庖丁道明，松井　章，馬淵和雄，宮下幸夫，森　浩一，脇田晴子，渡部明夫，（財）大阪文化財センター，奈良国立文化財研究所

なお小論は1990年２月におこなわれた特定研究研究会『日本歴史における地域性の総合的研究』

での報告を基にしている。

註

（1） 坪井良平　1984 『歴史考古学の研究』 ビジネス教育出版社・1989 『梵鐘と考古学』 ビジネス教育出版社・1991 『梵鐘の研究』 ビジネス教育出版社・1970 『日本の梵鐘』 角川書店

（2） 網野善彦　1972 「真継文書にみえる平安末～南北朝の文書について」『名古屋大学文学部研究論集，史学』・1973 「真継文書にみえる室町期の文書」『名古屋大学文学部研究論集，史学』・1974 「真継文書にみえる戦国朝の文書(一)」『名古屋大学文学部研究論集，史学』・1975 「中世中期における鋳物師の存在形態」『名古屋大学文学部研究論集，史学』・1976 「中世都市論」『講座　日本歴史』7　岩波書店・1982 「中世初期における鋳物師の存在形態」『名古屋大学日本史論集(上)』吉川弘文館・1983 「中世の鉄器生産と流通」『講座・日本技術の社会史』第5巻　株式会社日本評論社・1986 「河内日置荘と中世鋳物師」『河内鋳物師の歴史と技術』 美原町・1986 「中世の旅人たち」『週刊朝日百科日本の歴史』6　朝日新聞社

（3） 河音能平　1975 「蔵人所の全国鋳物師支配の成立過程」『美原の歴史』1号　美原町教育委員会・1977 「鎌倉前期河内鋳物師の一風貌」『美原の歴史』3号　美原町教育委員会

（4） 石野　亨　1977 『鋳造　技術の源流と歴史』 産業技術センター・1986 「わが国鋳造技術の史的変遷」『河内鋳物師の歴史と技術』 美原町

（5） 五十川伸矢　1982 「京都大学教養部構内AP22区の梵鐘鋳造遺構」『京都府埋蔵文化財情報』第5号・1988 「鴨東白河の鋳造工房―京都大学構内の鋳造に関する遺跡―」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』・1989 「遺跡から見た古代・中世の梵鐘鋳造技術」『河内鋳物師の技術と歴史』美原町・1991 「中世白河の鋳造工房」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅳ

（6） 石野　亨　1977 『鋳造　技術の源流と歴史』 産業技術センター。「烏丸神社址附鍋子丸旧蹟」1927 『大阪府史跡名勝天然記念物』第1冊

（7） 尾上　実　1984 『観音寺遺跡第一次発掘調査概要』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター。中村淳磯ほか　1986 『松原市　観音寺遺跡　第2次発掘調査概要』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

（8） 山本　彰ほか　1986 『真福寺遺跡』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター。山本　彰　1990 「真福寺遺跡の梵鐘鋳造遺構について」『梵鐘の音は時を越えて』 美原町。福岡澄男　1985 「河内鋳物師の里」『図説　発掘が語る日本史』第四巻（近畿編）株式会社　新人物往来社。鋳型と製品の推定については五十川伸矢氏のご教示を得た。

（9） 市本芳三ほか　1987 『太井遺跡(その1)』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター。鋤柄俊夫ほか　1987 『太井遺跡(その2)』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター。松山　聡ほか　1987 『太井遺跡（その3）』 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター。鋤柄俊夫ほか　1990 『太井遺跡（その4）・日置荘遺跡（その1―2）』 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター。鋤柄俊夫　1990 「太井遺跡の鋳造遺構について」『梵鐘の音は時を超えて』 美原町。美原町教育委員会の調査成果については庖丁道明・泉谷博幸氏のご教示・ご協力をいただいた。

（10） 金光正裕ほか　1988 『日置荘遺跡(その1)』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター。鋤柄俊夫ほか　1988 『日置荘遺跡(その2)』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター。江浦　洋ほか　1988 『日置荘遺跡(その3)』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター。入江正則　1988 『日置荘遺跡（その4）』 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター。小野久隆ほか　1989 『日置荘遺跡(その5)』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター。入江正則　1990 『日置荘遺跡（その2―2・その6）』 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター。入江正則　1991 『日置荘遺跡（その2―3・6―2）』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター。續　伸一郎　1991 『日置荘遺跡発掘調査概要報告―HKS-9地点・堺市日置荘原寺町215―1―』（堺市文化財概要報告第21冊）

（11） 橋本久和　1974 「中世村落の考古学的研究」『大阪文化誌』1巻2号

（12） 原口正三　1977 「古代・中世の集落」『考古学研究』92

（13） 奥野義雄　1977 「中世集落と住居形態の前提をめぐって」『大阪文化誌』2巻3号

（14） 石神　怡　1979 「各地の古代末から中世に至る遺跡について」『和気』和気遺跡調査会

（15） 坪之内徹　1981 「中世における墳墓と葬制(5)」『摂河泉文化資料』6―5

（16）中井　均　1987「中世城館の発生と展開」『物質文化』48。畿内以外では橋口定志　1988「中世方形館を巡る諸問題」『歴史評論』454。水藤　真　1989「村や町を囲むこと」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集。千田嘉博　1991「村の城館をめぐる五つのモデル」『年報中世史研究』第16号など

（17）広瀬和雄　1986「中世への胎動」『岩波講座　日本考古学』6

（18）佐久間貴士　1985「中世の開発と集落」『歴史科学』99・100合併号。1985「畿内の中世村落と屋敷地」『ヒストリア』第109号。また畿内以外では坂井秀弥氏が広い視点にたった考察を進めている（1985「頸城平野古代・中世開発史の一考察」『新潟史学』第18号）。

（19）橋本久和　1981「大阪府における中国陶磁器の出土状況」『貿易陶磁研究』No.1など。また宇野隆夫は土器類総体について詳細な分析から遺跡の個別性を提示している（1988「越中の国府・荘家・村落」『高井悌三郎先生喜寿記念論集　歴史と考古学』）。

（20）浜谷正人　1988『日本村落の社会地理』のなかで村落の統合などによる「ムラの空間類型的変化」が説明されている。

（21）広瀬和雄　1988「中世村落の形成と展開」『物質文化』50

（22）島田次郎　1963「荘園村落の展開」『岩波講座　日本歴史』6

（23）関口垣雄　1975「中世前期の民衆と村落」『岩波講座　日本歴史』5

（24）島田次郎ほか　1961「中世村落をめぐって―大会討議―」『地方史研究』49

（25）小山靖憲　1987「日本中世村落史の課題と方法」『中世村落と荘園絵図』　東京大学出版会

（26）原田信男　1988「中世の村落景観」『村落景観の史的研究』八木書店

（27）木村　礎　1988「展望」『村落景観の史的研究』八木書店

（28）吉岡康暢編　1983『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会・石川考古学研究会

（29）図15は土地条件図による表記であるが，日下雅義氏によれば（1980「「依羅池」付近の微地形と古代における池溝の開削」『歴史時代の地形環境』古今書院），段丘下位面が中位段丘，段丘低位面が低位段丘と沖積段丘，谷底平野と氾濫平野の分離など，記述に違いがみられる。小論では足利健亮・桑原公徳　1985「2　松原市の地形」『松原市史』第1巻に従い，本文では日下氏の表現を使用している。服部昌之　1976「美原町周辺の地形」『美原の歴史』第2号　美原町教育委員会

（30）森　浩一　1978「生産の発展とその技術」『大阪府史』第1巻

（31）日下雅義　1980「狭山池の変遷と西除・東除両河川の性格」『歴史時代の地形環境』古今書院　東除川は段丘を横断するかたちでつくられており，近世以降の運河と考えられる。さらに，水面が地表より低い面にあたるため，中・上流の地域では，物理的にも用水とすることが不可能である。

（32）前掲書『松原市史』第1巻

（33）金田章裕　1985『条里と村落の歴史地理学的研究』　大明堂
　　金田章裕　1985「中世の村落」『村落と開発　講座考古地理学』第4巻　学生社

（34）金田章裕　1971「奈良・平安期の村落形態について」『史林』第54巻第3号
　　金田章裕　1978「平安期の大和盆地における条里地割内部の土地利用」『史林』第61巻第3号

（35）金田章裕　1985「集村化現象の進展」『条里と村落の歴史地理学的研究』大明堂。板倉勝高　1952「尾張国富田庄を例とせる日本庄園の村落構造」『東北地理』5―1　東北地理学会。島田次郎は榎坂郷および垂水荘の集落の立地として神崎川の自然堤防上または扇状地の扇側部を（「中世村落の耕地と集落」『地方史研究』49，1961），高島緑雄は香取社領の村落を台地の縁辺を（「中世における香取社領の村落」『地方史研究』49，1961），吉田敏弘は薩摩国入来院を対象に中世は台地から台地縁辺部を，近世は段丘平野部を（「中世村落の構造とその変容過程」『史林』第66巻第3号1983）集落の立地としている。ただし金田氏は同時に大和盆地などで散在する微高地がそのまま村落の立地に対応しない場合がみられることも述べている。

（36）高重　進　1954「弘福寺領山田郡田図の集落とその比定」『史学研究』55　広島史学研究会など

（37）寶月圭吾　1950『中世灌漑史の研究』　目黒書店。高重　進　1972「古代中世の灌漑と空海の満濃池修築」『地理科学の諸問題』船越謙策教授退官記念事業会。上島　有　1970「庄園村落と灌漑用水」『京郊庄園村落の研究』　塙書房

（38）日下雅義　前掲書註29

（39）弘仁12年（821）の太政官符によれば，交野・丹比両郡は土地が高燥で干害を避けることができず，易田とされ，普通の二倍の田が与えられている（類聚三代格）。

(40) ただし泉北丘陵北東部の縁辺地域（堺市日置荘・登美丘，大阪狭山市茱萸木）では井戸水による灌漑が多くみられた。これが用水による村落共同体規制を離脱する1型式である指摘もある（福島雅蔵 1967 「灌漑水利」『狭山町史』第1巻)。

(41) 水野章二 1985 「中世村落と領域構成」『日本史研究』271

(42) 福島雅蔵 1967 「狭山池」『狭山町史』第1巻

(43) 福島 1967 前掲書註39

(44) 堺市役所 1971 『堺市史』続編第1巻より第1編第3章「律令国家の形成と堺」，第3編第2章「近世村落の成立」

文献および調査を伴う溜池

名称	所在地	形式	時期	備考
濁り池	大阪狭山市岩室	谷	1498	狭山町史1巻
北池	〃	〃	1583	〃
尻屋池	〃	〃	1601	〃
上池	〃	〃	1652	〃
芦池	〃	〃	1661	〃
永谷池	〃	〃	1645	〃
見取池	〃	〃	1686	〃
長池	〃 半田		1614	〃
にごり池	〃		1612	〃
出口池	〃		1619	〃
宮谷池	〃 茱萸木新田		1673	〃
今池	〃		1619	〃
青谷池	〃		1619	〃
西青谷池	〃		1619	〃
そうそう溜池	〃 半田		1637	〃
鉢ヶ坪溜池	〃		1639	〃
油田溜池	〃		1637	〃
みちや溜池	〃		1638	〃
青塚溜池	〃		1638	〃
六右衛門溜池	〃		1619	〃
新池	堺市菩提	皿	1612	堺市史続編1
新池	〃 日置荘西村	皿	1614	〃
前ヶ池	〃	皿	〃	〃
今池	〃 原寺			遺跡文献57
剣池	〃	谷		遺跡文献44
つむり池	〃 南花田	谷	年数知れず	堺市史続編1
穴ヶ池	〃	皿	〃	〃
米崎池	〃	皿	〃	〃
大泉池	〃	谷	〃	〃
頭泉池	〃	谷	〃	〃
新池	〃	皿	文禄	〃
轟池	〃 南野田		1621	〃
かこ池	〃		1621	〃
道池	〃		1621	〃
丈六池	〃 丈六	谷	1263以前	〃
長池	〃 石原町	東西	謙倉	遺跡文献41
大海池	松原市三宅		1600	松原市史1
深淵池	〃		1600	〃
正面池	〃 小川		1693	〃
三つ池	〃		1694	〃
稚児ヶ池	〃 松ヶ丘		11世紀以前	地名辞典
新池	立部			遺跡文献18
三保池	美原町大饗	皿	18世紀	地名辞典
落池	〃	皿	1607	地名辞典
白池	〃 真福寺	皿	近世	遺跡文献19
更ヶ池	〃 北余部			遺跡文献36

(45) 山口之夫・森 杉夫 1985 『松原市史』第1巻より「近世編 第3章 2 水利と灌漑」。なお美原町の池については嶋田 暁 1976 「美原町の川と道」『美原の歴史』第2号に述べられている。

(46) 金田 1978 前掲書註34

(47) 前掲書註45より「自然地理編 第1章 松原市の位置と地形環境」

(48) 日下 前掲書註29

(49) この部分の溜池は泉北丘陵の末端に築かれているものであるが，同様な景観は「日根野村絵図」でもみられる。（水田義一 1972 「台地上に位置する庄園村落の歴史地理学的考察」『史林』第55巻第2号など）

(50) 山本 彰ほか 1986 『真福寺遺跡』 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター，樋口吉文 1989 『石原町遺跡発掘調査報告』（堺市文化財調査報告第40集）など。

(51) また親池と子池（うつし池）の引水関係からみれば，溜池築造の契機のひとつを，親池の改修に求めることができる。この地域全体の親池とも言える狭山池の大規模改修は，天平宝字6年（762），建仁2年（1202），慶長13年（1608）が知られており，谷池と皿池の関係をこれらの改修に対応させて考えることもできようか。

(52) 金田章裕 1978 前掲書註34

(53) 丹南の場合，条里地割の分布が狭山池とその水路による灌漑範囲を南の境界としている点が指摘されている。（日下1980 前掲書註29）

(54) 服部昌之 1990 「第2章第3節 条里と交通路」『大阪府史』第2巻

（55）直木孝次郎　1985「古代編第2章　律令制下の丹比地方」『松原市史』第1巻

（56）日置荘周辺など（前掲書註44）

（57）日下　1980によれば，17世紀中頃に西除川と東除川との間に3本，西除川左岸に2本の流路があったとされる。なお，図18の水路は前掲書註42を基にしている。

（58）服部昌之　1975「美原町の字図」『美原の歴史』第1号　美原町教育委員会。なお服部英雄氏は耕作地地名による開発の復原をしているが（1983「小地名による中世の村の復原」『歴史公論』86　雄山閣），当該地域ではその小字名の成立が近世である場合も含まれると考えられるため，新出ではなく元来あったはずの「屋敷」名を採用した。

（59）末永雅雄・森　浩一　1953『河内黒姫山古墳の研究』（大阪府文化財調査報告書第1輯）大阪府教育委員会

（60）両道以外に大和と和泉を結ぶ道として，「茅渟道」も丹南を通過している。直木孝次郎　1978「茅渟の道について」『美原の歴史』第3号

（61）直木孝次郎　1985「古代編第1章　律令制以前の丹比地方」『松原市史』第1巻

（62）直木孝次郎　1976「丹比連について」『美原の歴史』第2号。吉田　晶　1983「古墳と豪族」『古代の地方史』3　朝倉書店ほか

（63）前掲書註55

（64）平凡社　1986『大阪府の地名』（日本歴史地名大系第28巻）。以下「地名辞典」

（65）式内社と廃寺は北部で阿麻美許曾神社・酒屋神社・田坐神社，東部で大津神社・野中寺，中部で丹比神社・櫟本神社・黒山廃寺・丹比廃寺，南部で狭山堤神社・狭山神社・菅生神社・東野廃寺などが知られている。さらに「天平13年記」には石原布施屋が設けられたとされ，「続日本後紀」承和8年（841）閏9月の条には松原市天美我堂または北新町付近に倉8宇・邑久宇からなる駅家が記載されている（地名辞典）。

（66）地名辞典。丹比郡が3分割される10世紀後半から11世紀前半は，丹南鋳物師が記録にあらわれ始める時期であり，遺跡・遺物の面からも重要な変革期である（拙稿　1988「畿内からみた古代末から中世の土器―模倣系土器生産の展開―」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ・広瀬和雄　前掲書註17）。その意味で村落の領域と関わる郷および郡の再編と範囲は特に注意が必要であろう。

（67）羽曳野市の説がある。地名辞典

（68）地名辞典

（69）黒山郷自体の領域の広さも指摘されている。水野正好　1978「河州丹南八上両郡境長和寺小考」『美原の歴史』第3号

（70）地名辞典

（71）清水三男　1942「荘園と中世村落の関係」『日本中世の村落』　日本評論社

（72）この地域全体の村落間結合については，近代村落のネットワークからの類推を考えている。おおむね村から出る道の数と方向により，東西幹線路をつなぐ村と南北道を中心とする村およびそれらの枝村の構造がうかがわれるであろう。例えば松原村の場合，新堂が本郷で上田・岡は枝郷であり，14世紀に上田・岡の集落があったか不明であるとされる（地名辞典）。

（73）ここではそれらの集落が内部構造として，集村化を進めていたかどうかについての評価は留保する。

（74）係数のつくりかたには様々な考え方があるが，ここでは最も普遍的に検出されるピット（柱穴）を基準とした。相対的で実験的なものとして理解されたい。包含層（1ポイント），ピット(2)，土坑(2)，溝（2から24），建物(24)，井戸（2から12）。建物は3×4間と2×3間の柱穴数の平均にピットの2ポイントを乗じた。井戸と溝は集落に伴う場合と，耕作地の場合で大きく異なる。前者の場合は1組の建物群と同等の価値をもつが，後者の場合は集落に対して意味的な度合は低い。それぞれ各調査成果を検討してポイントを付与したが，個別性の強いものとなった。補註2参照

定量分析地点表

No.	X	Y	遺跡名	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	主な遺物(除在地土器)	主な遺構	文献
1	22	−3	大津道							1			1		自然河川	33
1	22	−4	大津道									1	1	土師器皿（京都系），青磁碗（雷文），瓦器壺(獣面)	包含層	25

No.	X	Y	遺跡名	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	主な遺物(除在地土器)	主な遺構	文献
1	37	-2	大津道(No.114)							1	1	1	1	中世須恵器	包含層	13
2	4	-3	蔵前町							1	1	1	1		中世散布地	54
3	6	-1	船堂町							6	6	6	6		中世集落	54
4	13	-2	船堂東(No.159)								2				溝	32
5	10	-5	南花田							1	1				包含層	55
5	12	-5	南花田		24					26				墨書土器	井戸，溝，建物	17
5	12	-5	南花田(7工区)								4				溝，土坑	34
5	12	-6	南花田						72	72	2	2			井戸，建物，溝	17
5	13	-4	南花田(6工区)							32				白磁碗	溝，井戸，土坑	34
6	15	-3	東花田												集落	54
7	16	-1	正殿				1	1	1	1	1				平安～中世散布地	54
9	18	-1	布忍(No.37)			4									土坑，ピット	39
9	20	-1	永興寺跡(No.111)								8	8	4		井戸，土坑	23
9	21	-3	布忍(No.73)							8					土坑，ピット	32
10	20	-5	八子池(No.98)										1		包含層	16
11	20	-6	南新町(No.98)						1	1					包含層	16
11	21	-6	南新町(No.102)		8										土坑，ピット	32
11	22	-5	南新町(No.93)										1		包含層	13
11	22	-6	南新町(No.72)	24	25	25								墨書土器	建物，土坑，井戸，溝	39
12	28	-4	高見の里		1	2	2	2	2	2	2	2	2		縄文～中世集落	54
13	37	-1	上田町(No.113)				4								溝	39
13	37	-2	上田町(No.145)				11	7	7	7					溝，ピット，土坑	32
13	37	-3	上田町(No.144)					43	43					白磁	井戸，溝，土坑，ピット，屋敷？	32
13	38	-1	上田町(No.39)				10								ピット	39
13	38	-2	上田町(No.110)		16	16	17								建物，溝，土坑	39
13	39	-2	上田町(No.100)							2	2				溝	39
14			丹比柴籬宮跡											土師器「て」字皿		6
14	31	-9	丹比柴籬宮跡(No.65)						1						包含層	13
14	32	-4	丹比柴籬宮跡(No.42)							1	1				包含層	16
14	34	-11	丹比柴籬宮跡(No.132)						1	1				白磁碗	包含層，土坑	16
14	34	-12	丹比柴籬宮跡(No.70)							6	6	1		青磁他	包含層，井戸	32
14	36	-9	丹比柴籬宮跡(No.73)							1	1			青磁碗	包含層，鯉野池堤13世紀以前	16
14	36	-11	丹比柴籬宮跡(No.65)				2	2							溝	16
14	36	-11	丹比柴籬宮跡(No.139)							1				青磁碗	包含層	23
14	37	-1	丹比柴籬宮跡(No.15)		50		15	15							溝，建物跡，土坑	23
14	37	-3	丹比柴籬宮跡(No.144)				2	2						白磁碗，須恵器甕，瓦	溝，ピット	23
14	37	-6	丹比柴籬宮跡(No.151)		50										溝，土坑，ピット	32
14	37	-8	丹比柴籬宮跡(No.49)							2					溝	23
14	37	-12	丹比柴籬宮跡(No.33)				3								ピット，包含層	16

No.	X	Y	遺跡名	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	主な遺物(除在地土器)	主な遺構	文献
14	38	-2	丹比柴籬宮跡(No.79)										1		中世～近世包含層	13
14	38	-10	丹比柴籬宮跡(No.39)						6						ピット	16
14	38	-10	丹比柴籬宮跡(No.134)							3	3		1		溝	23
14	38	-12	丹比柴籬宮跡(No.56)		24										建物跡	32
14	38	-12	丹比柴籬宮跡(No.81)				2	2							土坑	23
14	39	-12	丹比柴籬宮跡(No.91)						1						包含層	16
16	42	-3	西大塚						4	4	4	4	4		中世集落	54
18	1	-12	新金岡更池							40	40	40	40	平安後期瓦，瓦器鍋	建物遺構群	2
18	1	-13	新金岡更池							1				近世陶磁器		4
18	1	-13	新金岡更池							1			10		土坑，溝，井戸	7
18	2	-13	新金岡更池							122	102	54	32	白磁碗，明染付，備前擂鉢，青磁碗，魚住鉢，丹治系？瓦	土坑，井戸	51
18	3	-13	新金岡更池							108	152	103	5	魚住鉢，常滑甕，青磁碗，鋳型(13or15世紀)	土坑，溝，井戸	50
19	18	-14	中村町							1	1	1	1		中世散布地	54
20	20	-10	河合	24	24									墨書土器	溝	24
20	21	-10	河合							2					ピット	24
21	43	-10	観音寺		1					12				白磁	井戸	10
21	43	-11	観音寺(第1調査区)										12	漆器椀	溝	18
21	43	-12	観音寺(第2調査区)						108	144				魚住鉢，白磁碗	建物群，区画溝	18
21	43	-12	観音寺							2				瓦器足釜，石鍋，魚住鉢，白磁碗Ⅴ類	南北大溝	11
21	43	-13	観音寺(第3調査区)			6			48		196	12		魚住鉢，炉壁(14世紀)	建物群	18
21	43	-14	観音寺(第4調査区)			24			96	160	160	26	24	土師器杯「丹比郡」，炉壁（14・15世紀）	建物群，区画溝	18
21	43	-15	観音寺(第5調査区)			264									建物群，溝	18
21	43	-16	観音寺(第6調査区)		120	4				20	20				竪穴住居，建物，溝，新池(-2m)	18
21	44	-92	観音寺							2					溝	10
21	44	-10	観音寺									1			埋没谷	10
23	1	-17	長曽根	240	72		4		42	42					建物群	53
23	1	-17	長曽根								4	4		青磁椀	集落	42
24	5	-19	金岡神社							37	37				建物	31
24	6	-19	金岡神社							4	20	16	2		堀	12
26	18	-32	清堂					2	2	2	2	2			中世集落	54
27	36	-16	薬仙寺					2	2	2	2	2			中世集落	54
28	41	-14	立部(No.92)					10						炭，焼土	土坑，ピット	13
28	42	-13	立部(No.132)						2	2				白磁	土坑	23
29	42	-17	観音寺跡				96	96							平安社寺	54
30	18	-1	金岡							136				魚住甕	ピット群，土坑，溝	15
31	17	-21	石原町北					2	2	2	2	2			中世集落	54
32	22	-24	小寺							15	15	1		青磁碗，白磁碗Ⅴ類，魚住鉢	5間建物跡，落込み	22
32	22	-25	小寺							30					溝，石敷，建物跡	49
33	22	-22	八下							1	1				包含層	56
33	24	-22	八下						100	130				高台付土師器，魚住擂鉢，白磁碗Ⅳ類，獣脚鋳型？(12世紀)	建物，井戸，溝，不定形土坑	45

No.	X	Y	遺跡名	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	主な遺物(除在地土器)	主な遺構	文献
33	31	-21	八下(No.34)							6					井戸,溝,ピット	13
34	36	-20	丹南				2	2	2	2	2				中世集落	54
35	42	-19	丹上	6	6					6	6			須恵器	建物跡	49
35	43	-18	丹上						1		1			白磁碗Ⅳ類・口禿皿,須恵器	溝	29
35	43	-19	丹上	50	118										建物跡,包含層	20
35	43	-19	丹上		2										溝	49
35	43	-20	丹上		1	1									溝	20
35	43	-21	丹上		2										溝	20
35	43	-22	丹上	2	24		72				6				建物跡	21
35	43	-23	丹上	2	10		172				2				建物跡	21
35	43	-24	丹上	2			1				2				建物跡	21
35	43	-25	丹上	2			2			2	24				建物跡	21
35	44	-20	丹上		2										溝	20
35	44	-21	丹上		24										建物跡	20
36	16	-27	石原町(第2地区)							1	1	1			溝	41
36	16	-28	石原町(第1地区)					1	2	6	2	2		備前,青磁蓮弁碗,白磁碗	溝,長池堤下部から瓦器碗(1)	41
36	17	-27	石原町(第3地区)							1	1				溝	41
36	17	-28	石原町(第4地区)							1	1				溝	41
36	17	-30	石原町(第5地区)							1	1				溝	41
36	24	-23	石原町						12	14		1		備前擂鉢,土師器羽釜,常滑甕,須恵器	溝,建物跡,焼土と焼け石	14
36	24	-27	石原町											近世雑器	近世包含層	40
36	24	-28	石原町					2							溝,包含層	40
36	24	-29	石原町										2		溝,包含層	40
37	28	-28	長和寺				96	96							平安社寺	54
38	27	-30	大饗城土塁跡									96			中世城館	54
39	27	-32	八坂神社								48				南北朝社寺	54
40	25	-33	城岸寺城跡							48					石敷遺構,礎石建物	54
43	17	-36	日置荘西町							2	2	2			井戸,土坑,ピット	9
44	11	-45	日置荘西町窯跡群								1				包含層	38
44	12	-45	日置荘西町窯跡群									1			包含層	38
44	13	-45	日置荘西町窯跡群	1						1	1			魚住鉢	包含層	38
45	9	-43	日置荘							12		1		漆器椀	井戸	48
45	11	-43	日置荘西町窯跡群							2	2			魚住鉢	土坑	44
45	16	-43	日置荘Mトレンチ							6				青磁碗	墓	37
45	17	-43	日置荘Lトレンチ		168	72	288	288							集落	37
45	18	-42	日置荘Kトレンチ							2					集落	36
45	18	-42	日置荘Kトレンチ			52									集落	37
45	19	-41	日置荘					72		32				青磁碗,鋳型(13世紀)	井戸,不定形土坑,建物跡	52
45	19	-42	日置荘Iトレンチ						2	320	64			滓,炉壁,白磁四耳壺・碗,青磁碗・皿,魚住鉢,常滑甕,備前?	集落,墓,溶解炉	36
45	20	-41	日置荘G・Hトレンチ									24		羽口,炉壁,青磁碗・皿,常滑・備前甕・壺・擂鉢,白磁碗・壺	集落	36
45	20	-42	日置荘G・Hトレンチ							2	10	54	54	魚住擂鉢,石臼,輸入陶器壺,瀬戸平碗・卸皿・水注・鉢	集落	36
45	21	-41	日置荘F・Gトレンチ							74	149	260	260	丹治系?瓦,砥石,滓,炉壁,石鍋,瀬戸碗,常滑甕,備前甕・擂鉢,魚住鉢,青磁碗・香炉,瀬戸皿,信楽甕,白磁碗・合子,明染付	集落	36
45	22	-40	日置荘Eトレンチ							51	102	86		滓,鋳型,石鍋,炉壁,須恵器,	集落	36

No.	X	Y	遺　跡　名	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	主な遺物(除在地土器)	主な遺構	文献
45	22	−41	日置荘Eトレンチ									108	108	青磁碗，白磁碗，皿・合子・壺 魚住鉢，山茶碗，常滑甕・擂鉢，備前擂鉢，信楽壺，瀬戸皿・碗	集落	36
45	23	−40	日置荘Dトレンチ							6	72			魚住擂鉢，青磁碗，白磁皿，常滑甕，砥石，羽口，炉壁	館	36
45	24	−39	日置荘Bトレンチ							1	1			青磁	集落	35
45	24	−40	日置荘Cトレンチ						26	104					不定型土坑，集落	35
45	25	−38	日置荘		1									須恵器短頸壺		49
45	25	−39	日置荘Bトレンチ	2						279	279				集落	35
45	25	−40	日置荘Cトレンチ	1										須恵器	溝	35
45	25	−40	日置荘									2			ピット	49
45	26	−38	日置荘						34		29	29			井戸，溝，ピット阿部	49
45	29	−36	日置荘						40	184	102	48		鋳型(12世紀)，滓	区画溝，建物，土坑群，井戸	44
45	27	−38	日置荘Aトレンチ						50	48		24	24		区画溝，土坑	35
45	27	−39	日置荘Aトレンチ									36			土坑，井戸	35
46	31	−41	太井	120										須恵器	竪穴住居跡，建物跡	43
46	32	−35	太井	1	1										包含層	49
46	32	−36	太井I・Jトレンチ				50							滓	建物，滓集中	28
46	33	−36	太井Hトレンチ	144	96									新羅土器	建物，井戸，溝	27
46	33	−36	太井Hトレンチ		120	30								滓，羽口，坩堝，石帯	建物，井戸，溝，鋳造土坑	27
46	33	−36	太井		60	22									建物跡，溝	49
46	33	−37	太井Iトレンチ				2							滓	滓集中	28
46	33	−41	太井						20	20					井戸	49
46	33	−37	太井Gトレンチ		24						1				建物	27
46	34	−36	太井Gトレンチ		2										溝	27
46	35	−35	太井Eトレンチ		24										建物	27
46	36	−34	太井Dトレンチ		2					26					建物	26
46	36	−35	太井Fトレンチ		2										流路	26
46	36	−37	太井		1										包含層	49
46	37	−33	太井							84	84	12			竪穴，ピット群，溝	46
46	37	−33	太井Bトレンチ		2		6							滓，銭貨	流路	26
46	37	−34	太井Cトレンチ									90	90	瀬戸鉄釉瓶子，輸入陶器壺	井戸，竪穴	26
46	38	−33	太井Bトレンチ		2		4							滓，銭貨(10世紀)	流路	26
47	38	−32	真福寺4工区	6	120			1	1	106			2	褐釉四耳壺，滓，鋳型	瓦窯，白炭窯，鋳造土坑，建物	19
47	39	−29	真福寺							1	1				包含層	49
47	39	−30	真福寺							2	2				溝	49
47	39	−31	真福寺3工区		2		2		2	44				白磁碗	建物，溝	19
47	40	−30	真福寺							1						49
47	41	−28	真福寺1工区											近世雑器	近世池堤	19
47	41	−29	真福寺2工区							12	12				建物	19
48	47	−27	郡戸							1	1				包含層	30
49	33	−26	大保								40				建物，溝	54
49	33	−27	大保								40				建物，溝	54
49	34	−25	大保								20	20			建物，自然流路	49
49	34	−26	大保								40				建物，溝	54
49	34	−27	大保								40				建物，溝	54
49	35	−25	大保								20	20			建物，自然流路	49
51	39	−33	黒山廃寺		24									瓦，瓦塔	石敷遺構	5

No.	X	Y	遺跡名	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	主な遺物(除在地土器)	主な遺構	文献
52	40	-34	丹比神社		96	96									奈良社寺	54
53	46	-36	丹比廃寺塔跡		96										奈良社寺	54
54	38	-41	黒山	1	1										包含層	49
54	39	-39	黒山		2						2				溝	49
55	41	-44	平尾	4	4										溝	8
55	42	-43	平尾	200	200										建物群	1
55	43	-44	平尾									1	1		包含層	3
59	18	-50	丈六大池						1	1	1	1		褐釉四耳壺，白磁碗	包含層	47
59	18	-51	丈六大池						1	1	1	1		白磁碗	包含層	47
60	25	-51	北野田							2	2	2			中世集落	54

定量分析地点の参考文献

No.	発行元	発行年	文献
1	大阪府教育委員会	1975	平尾遺跡発掘調査概要
2	堺市教育委員会	1978	新金岡町所在遺跡発掘調査抄報
3	元興寺文化財研究所	1979	美原町町道試掘調査概要報告書
4	堺市教育委員会	1980	新金岡所在更池遺跡発掘調査報告（堺市文化財調査報告６）
5	美原町教育委員会	1980	黒山廃寺発掘調査概要
6	大阪府教育委員会	1981	丹比柴籬宮跡発掘調査概要１
7	堺市教育委員会	1982	新金岡更池遺跡発掘調査報告（堺市文化財調査報告10）
8	大阪府教育委員会	1982	平尾遺跡発掘調査概要
9	堺市教育委員会	1984	日置荘西町遺跡発掘調査報告（堺市文化財調査報告19）
10	大阪府教育委員会	1984	大塚遺跡発掘調査概要１
11	大阪文化財センター	1984	観音寺遺跡第１次発掘調査概要
12	堺市教育委員会	1985	金岡神社遺跡発掘調査報告（堺市文化財調査報告22）
13	松原市教育委員会	1985	松原市遺跡発掘調査概要　昭和59年度
14	石原町遺跡調査団	1985	堺市石原町遺跡
15	大阪府教育委員会	1985	金岡遺跡発掘調査概要
16	松原市教育委員会	1986	松原市遺跡発掘調査概要　昭和60年度
17	大阪府教育委員会	1986	南花田遺跡発掘調査概要１
18	大阪文化財センター	1986	観音寺遺跡第２次発掘調査概要
19	大阪文化財センター	1986	真福寺遺跡　調査の概要
20	大阪文化財センター	1986	丹上遺跡（その１）調査の概要
21	大阪文化財センター	1986	丹上遺跡（その２）調査の概要
22	美原町教育委員会	1986	小寺遺跡発掘調査概要（美原町文化財調査概要２）
23	松原市教育委員会	1987	松原市遺跡発掘調査概要　昭和61年度
24	大阪府教育委員会	1987	河合遺跡
25	大阪府教育委員会	1987	大津道遺跡発掘調査概要
26	大阪文化財センター	1987	太井遺跡（その１）調査の概要
27	大阪文化財センター	1987	太井遺跡（その２）調査の概要
28	大阪文化財センター	1987	太井遺跡（その３）調査の概要
29	大阪文化財センター	1987	丹上遺跡（その３・５）調査の概要
30	羽曳野市教育委員会	1988	古市遺跡群Ⅸ（羽曳野市埋蔵文化財調査報告書16）
31	堺市教育委員会	1988	金岡神社遺跡発掘調査報告（堺市文化財調査報告38）
32	松原市教育委員会	1988	松原市遺跡発掘調査概要　昭和62年度
33	大阪府教育委員会	1988	大津道遺跡発掘調査概要２
34	大阪府教育委員会	1988	南花田遺跡発掘調査概要３
35	大阪文化財センター	1988	日置荘遺跡（その１）調査の概要
36	大阪文化財センター	1988	日置荘遺跡（その２）調査の概要
37	大阪文化財センター	1988	日置荘遺跡（その３）調査の概要
38	大阪文化財センター	1988	日置荘遺跡（その４）調査の概要
39	松原市教育委員会	1989	松原市遺跡発掘調査概要　昭和63年度
40	堺市教育委員会	1989	昭和61年度水道管布設に伴う立会調査報告（堺市文化財調査報告43）
41	堺市教育委員会	1989	石原町遺跡発掘調査報告（堺市文化財調査報告40）

No.	発　行　元	発行年	文　献
42	堺市教育委員会	1989	長曽根遺跡発掘調査報告（堺市文化財調査報告42）
43	大阪府教育委員会	1989	太井遺跡発掘調査概要
44	大阪文化財センター	1989	日置荘遺跡（その5）調査の概要
45	八下遺跡調査会	1989	八下
46	美原町教育委員会	1989	黒姫山古墳発掘調査概要
47	堺市教育委員会	1990	丈六大池遺跡発掘調査概要報告書（堺市文化財調査概要報告3）
48	堺市教育委員会	1990	日置荘遺跡発掘調査概要報告（堺市文化財調査概要報告1）
49	大阪文化財センター	1990	太井遺跡（その4ほか）調査の概要
50	堺市教育委員会	1991	新金岡更池遺跡発掘調査概要報告（堺市文化財調査概要報告16）
51	堺市教育委員会	1991	新金岡更池遺跡発掘調査概要報告（堺市文化財調査概要報告20）
52	堺市教育委員会	1991	日置荘遺跡発掘調査概要報告（堺市文化財調査概要報告21）
53	堺市教育委員会	1992	長曽根遺跡現地説明会資料
54	大阪府教育委員会	1992	大阪府遺跡地名表
55	大阪文化財センター	1992	南花田遺跡　大阪府下埋蔵文化財研究会（第26回）資料
56	大阪文化財センター	1992	八下遺跡　大阪府下埋蔵文化財研究会（第26回）資料
57	大阪文化財センター	1991	日置荘遺跡（その2―3・6―2）調査の概要

(75)　方眼による分析とその問題については，奥野隆史　1977『計量地理学の基礎』大明堂。その実際については藤本利治　1989「中世城館分析にみる地域性」『歴史時代の集落と交通路』地人書房によっている。

(76)　古代を考える会　1976『平尾遺跡の検討』

(77)　この視点は矢田俊文氏の考察に負うところも多い（1990「中世後期越後国の集落に関する二つの課題」『かみくひむし』第80号かみくひむしの会・1991「中世越後における集落の移動に関する一考察」『新潟史学』第26号）。

(78)　金田章裕　1985「条里プラン」『条里と村落の歴史地理学的研究』大明堂

(79)　ただし，当地域の条里呼称が不明な点とあわせて，これらの領域が里と一致しない点で，本来の条里村落に対して2次的な位置にある可能性も否定できない。

(80)　遺跡文献20・21

(81)　山中敏史　1984「遺跡からみた郡衙の構造」『日本古代の都城と国家』塙書房

(82)　高重　進　1975「中世的村の形成」『古代・中世の耕地と村落』大明堂

(83)　ただし真福寺遺跡ではこの時期と推定される建物においても散居的な景観を示すものがある。これが小村を構成するか疎塊村の縁辺部となるか問題であるが，全体の趨勢は後者の可能性を示していると言える。

(84)　渡辺澄夫氏（1970「環濠集落の形成と郷村制との関係」『増訂畿内庄園の基礎構造』下　吉川弘文館）をはじめとして，中世村落のほとんどの景観研究が集村化の時期とメカニズムの説明をひとつの大きな課題としていることは言うまでもない。その意味において小論でも，近世のコンパクトな集村形態と中世の集落遺跡にみられる状況との間の問題に関心をもち続けてきた。しかし，各所で使われている用語としての一元的な「集村」に対し，その形態は環濠の有無からして多様であり，その成因についても地域と時代を反映して多岐におよぶことが考えられる。

　したがって中世村落個々の個別性を重視する小論においては，「集村」は村落の移動バリエーションとしてとらえることとしたつもりである。重要な点は「集村」のメカニズム，あるいは「集村」をする必要が無かった場合のそれぞれの環境の説明である。

(85)　石尾和仁氏はこの形態を，集村化を遂げた村落形態としている（1991「中世村落の変容と集溝屋敷地」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol. 2（財）徳島県埋蔵文化財センター）。

(86)　もちろん近年の景観復原的研究に対し十分にその成果をとりいれることができたわけではない（真野和夫　1985「田染荘の調査」『考古学ジャーナル』No.241などの豊後国田染荘に関わるもの。高松市教育委員会による弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域の一連の調査(1988～)。田中　稔ほか　1990「中世荘園遺構の調査ならびに記録保存法―備後国太田荘―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第28集。竹本豊重　1991「地頭と中世村落―備中国新見荘―」『中世の村落と現代』吉川弘文館など）。学際的な環境の中で批判的に発展させることが課題とされる。

(87)　坪井良平　1983「梵鐘の鋳造址」『佛教藝術』148号

(88) 杉山　洋　1983 「寺院付属の金属関係工房」『佛教藝術』 148号
(89) 鋳造遺跡研究会　1991 「日本歴史時代鋳造関係資料」『鋳造遺跡研究会資料』
(90) 林　純　1988 「近江における金属の生産と流通」『近江の鋳物師』2　滋賀県教育委員会。同氏は時代により官営・有力氏族・中世鋳物師・戦国領主による支配を考えている。また五十川伸矢氏は炉壁と滓の量から，一時的か継続的かの視点で鋳造遺跡の質的分類を試みている(1991 「中世白河の鋳造工房」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅳ)。
(91) 松村恵司ほか　1989 『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報第46冊)。杉山　洋　1990 「奈良時代の金属生産」『佛教藝術』 190号
(92) 中谷雅治　1980 「恭仁宮跡」『埋蔵文化財発掘調査概報』第1分冊　京都府教育委員会
(93) 横川好富ほか　1984 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告XIV　台耕地(Ⅱ)』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集)
(94) 石松好雄ほか　1980 「第65―2次調査」『大宰府史跡　昭和54年度発掘調査概報』 九州歴史資料館
(95) 續伸一郎　1991 「日置荘遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』 第21冊
(96) 吉川義彦ほか　1982 『平安京左京八条三坊』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告　第6冊)
(97) 笠井敏光ほか　1987 「古市遺跡(86―1)」『古市遺跡群』Ⅷ(羽曳野市埋蔵文化財調査報告書14)
(98) 石橋正嗣ほか　1979 『軽野正境遺跡発掘調査報告書』 秦荘町教育委員会
(99) 續　伸一郎　1990 「堺環濠都市遺跡(SKT 153地点)発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第51集　堺市教育委員会
(100) 嶋谷和彦　1990 「北花田口遺跡(KHG 2地点)発掘調査報告」『堺市文化財調査概要報告』第5冊　堺市教育委員会
(101) 山本信夫・狭川真一　1984 「鉾ノ浦遺跡梵鐘鋳造遺構発掘調査速報」『古代研究』27 (財)元興寺文化財研究所。山本信夫・狭川真一　1987 「鉾ノ浦遺跡」『佛教藝術』174号
(102) (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1990 『金井遺跡B地区現地説明会資料』。(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1990 『住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財発掘調査現地資料〔足洗遺跡〕〔金井遺跡B区〕』。赤熊浩一　1991 「埼玉県金井遺跡B区の調査」『鋳造遺跡研究会資料』
(103) 平井寿一ほか　1990 「中村遺跡」『埋蔵文化財発掘調査　1989年度　年報』 (財)栗東町文化体育振興事業団
(104) 前掲書註101
(105) また土器工人との関連も考えられるかもしれない。なお台耕地遺跡(前掲書註93)は東日本におけるⅠ期の例であるが，その末期段階でⅡ期の特徴があらわれることを，同書中でも考察している。
(106) ただしそのメカニズムは単純ではなく，現象面としては，古代寺院の付属工房として「瓦窯や溶解炉などの生産施設が，一つの工房としてのまとまりを持っていたと推定」できる観世音寺の例(杉山前掲書註88)と鎌倉初期において「杣工，製鉄，作陶は同一衆であろうと考えられる」北沢遺跡の例が対比される(川上貞雄　1992 『北沢遺跡群』(豊浦町文化財調査報告5)豊浦町教育委員会)。
(107) 本項の技術的な面は，酒井良太郎・柴田孝夫　1955 『新制　鋳造作業法』 オーム社，木下禾大　1970 『鋳造工学概論』 日刊工業新聞社，堤　信久ほか　1970 『鋳造工場設備』(鋳造技術講座14) 日刊工業新聞社，を参考にした。
(108) 朝倉秋冨　1986 「青銅製品　付その鋳造関係」『倉吉の鋳物師』倉吉市教育委員会
(109) 五十川　1991 前掲書註90
(110) 山本信夫　1990 「太宰府を中心とした鋳物生産遺構について」『梵鐘の音は時を超えて』美原町。
(111) 杉山　1990 前掲書註91
(112) 鋳型砂に求められる条件は，耐熱性，保温性，弾性，強度，成型性，通気性，復用性にあり，代表的なものは天然に粘土分を多く含んだ山砂，石英分の高い天然珪素などであり，石英の小粒子とカオリン系粘土質を混合させたものなども使用できるそうである。ちなみに羽曳野丘陵のうち狭山池北東部は鋳型土の有名な産地であり(末永雅雄　1967 「狭山の鋳物師」『狭山町史』第1巻)，その西方が陶邑遺跡群にあたる。
(113) 板倉勝高　1970 「真継鋳物師の分布と残存形態」『歴史地理紀要』12
(114) 門脇尚子　1986 「鋳物師と地域社会とのかかわり」『倉吉の鋳物師』倉吉市教育委員会

(115) 近藤雅樹　1988「三俣の鳴り物作り　鋳造作業とその空間」『近江の鋳物師』2　滋賀県教育委員会　補註3参照

(116) このうち北群の1棟は5間1面と考えられる。

(117) 伊藤鄭爾　1958『中世住居史』

(118) また板倉勝高氏は絵図に描かれた住居を4類に分け，各々その数を示している。絵図に対する史料批判を考慮せずにみると，その中で最小の住居の数は富田荘・東郷荘・足守荘で80数%を示す（1952「尾張国富田庄を例とせる日本庄園の村落構造」『東北地理』5―1）。また黒田日出夫（1989「荘園絵図の史料学」『荘園の成立と領有』（講座　日本荘園史1）吉川弘文館）によると，「越後国奥山荘波月条付近傍絵図」の建物は領主と一般の2タイプに描かれており，その比率は約1：9である。また浅香年木氏は，備中国新見荘において，荘・郷内居住の工人が「屋敷」を所有し，また「屋敷」呼称が上層住人に限られている例を述べている（1980「中世の技術と手工業者の組織（2　荘・郷居住手工業者と給免田）」『岩波講座　日本歴史6』）。

(119) 宮川　満　1979「地頭および土豪層の動向と悪党」『大阪府史』第3巻。河音能平　1984「畿内在地領主の長者職について」『中世封建社会の首都と農村』東京大学出版会

(120) その意味で神南備の種松の屋敷（岩波書店　1988「宇津保物語1　吹上」『日本古典文学大系』10）についても類似した規模で考えられないであろうか。

(121) 前掲書註21　山口県教育委員会　1980『下石田遺跡』でも同様な傾向が示されている。

(122) 仲川　靖　1988「近江八幡市久郷屋敷跡の掘立柱建物群について」『滋賀考古学論叢』第4集。葛野泰樹　1990「近江の中世集落について」『日本歴史』10月号

(123) 坂井秀弥　1990「出雲崎町寺前中世遺跡の調査」『新潟県考古学会第2回大会研究発表会　発表要旨』。12世紀後半～13世紀代を中心とする在地の領主の屋敷。このうち13世紀前半までの段階で大量の炉壁・スラグ・羽口・鋳型などを伴う。また，後の時期で大和型と推定される瓦器碗が出土している（坂井秀弥氏のご教示による）。

(124) 永原慶二　1985「中世の社会構成と封建制」『講座　日本歴史』4　東京大学出版会。上島　有　1970「庄民の構成」『京郊庄園村落の研究』塙書房。黒田俊雄　1962「鎌倉時代の荘園の勤農と農民層の構成（上）」『歴史学研究』No. 261・1962「鎌倉時代の荘園の勤農と農民層の構成（下）」『歴史学研究』No. 262

(125) 小山靖憲　1987「初期中世村落の構造と役割」『中世村落と荘園絵図』東京大学出版会

(126) 網野　1982　前掲書註2　渡辺澄夫　1970「結論　畿内庄園の基礎構造」『増訂　畿内庄園の基礎構造』下　吉川弘文館

(127) 網野　1982　前掲書註2

(128) なおこの鋳物師の階層的組織については，網野善彦氏が大河直躬氏の（『番匠　ものと人間の文化史』1971　法政大学出版局）見解を引用し，それが日常の身分的な階層ではなかったあり方を指摘している（網野　1982　前掲書註2）。また工人の階層と作業組織に関して，直接比較はできないが，石山寺造営時の鏡4面の製作に10人，政所の鋳物所で5人（杉山　1990　前掲書註91），熊本市大慈寺鐘の銘文によれば大工大春日国正と小工18人，高野山文書の「大湯屋釜修造用途註文」によれば惣大工丹治国高と多々羅座別に列大工10人の名前が記されている（坪井良平　1970　前掲書註1）。

(129) 前掲書註113

(130) 広瀬和雄氏は（前掲書註21）さらに小規模な建物の階層も仮定しており（20m²程度），それを下人クラスとすれば，この住居はいわゆる「小百姓身分」にあたることになる（河音能平　1984「丹波国田能庄の百姓とその「縁共」について」『中世封建社会の首都と農村』東京大学出版会）。

(131) 赤羽一郎　1984『常滑焼』ニューサイエンス社

(132) 拙稿　1985「中世信濃の東海系移入雑器」『考古学と移住・移動』（同志社大学考古学シリーズⅡ）

(133) 田口昭二　1983「美濃における白瓷と山茶椀」『美濃陶磁歴史館報』Ⅱ　土岐市

(134) 藤沢良祐　1984「"古瀬戸"概説」『美濃陶磁歴史館報』Ⅲ　土岐市

(135) 吉岡康暢　1987「中世陶器の生産経営形態」『国立歴史民俗博物館研究報告第』12集・1989「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集ほか

(136) 森　浩一ほか　1956「大阪府高石町伽羅端遺跡調査報告」『古代学研究』15・16号

(137) 佐久間貴士ほか　1984「菱木下遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　(財)大阪文化財センター

(138) 藤沢一夫 1954 「河内萩原寺考」『日置荘町誌』

(139) 前章で整理した南河内の遺跡にあわせて和泉地域の主要な中世前期遺跡としては平井遺跡・箕土路遺跡・山直中遺跡・和気遺跡などがあげられるが，これらの資料は殆ど見ることが無い。

(140) 日本貿易陶磁研究会による1985『日本貿易陶磁文献目録』Ⅰを資料として計測した。

(141) 1とあわせて渡部明夫氏のご教示による。渡部明夫 1980 「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山猛先生古希記念 古文化論攷』。渡部明夫・田村久雄・町川義晃 1980 「綾南町陶窯跡群採集の須恵器」『香川史学』第9号

(142) 鈴木康之氏のご教示による。また伊藤 晃氏・上西節雄氏・荻野繁春氏にもご教示いただいた。

(143) 福岡県早良区田村遺跡出土の鉢とあわせて，吉岡康暢氏のご教示による。福山市教育委員会 1983 「鎌山遺跡」『福山市文化財年報（昭和57年度）』19。他に甕胴部片であるが，外面に平行条線叩き，内面に刷毛目を残す製品も見られ，やはり瀬戸内東部産と考えられる。補註1参照

(144) 吉岡康暢 1985 「経外容器からみた初期中世陶器の地域相」『紀要』第14号 石川県立郷土資料館

(145) 前掲書註138

(146) 坪井良平 1973 前掲書註1

(147) 山本・狭川 前掲書註101

(148) 豊田 武 1935 「大和の諸座續篇(中)」『歴史地理』第66巻2號・1936 「中世の鋳物業(上)」『歴史地理』第67巻 第1号日本歴史地理学会・1936 「中世の鋳物業(下)」『歴史地理』第67巻 第2号日本歴史地理学会・1944 『中世日本商業史の研究』岩波書店・1985 「中世手工業の性格」「金属工業」『産業史1 体系日本史叢書10 第2版』山川出版社。ほかに田中久夫 1988 「河内国丹南郡狭山郷日置庄の鋳物師と鉄の鍋」『橿原考古学研究所論集』第十 吉川弘文館

(149) 前掲書註2・3

(150) 網野氏は両者の関係について，それらが重なりあう組織か，別個の組織かの明確な判断は保留し，多少とも性格を異にする別々の集団と評価している（網野1982）

(151) すべての灌漑条件が整った近世河内国一国村高控帳（正保郷帳の写しとみられる）によれば（地名辞典），日置荘3村の1km²あたりの単位収量は810～1183石となり，丹南できわめて高い水準にある（表参照）。

(152) 溜池と異なり西除川からの直接取水は，灌漑条件に関して古代から近世を通じて変化がみられないものと推測される。丈六・高松・原寺・北の各村は「狭山池常水掛リ之御田地」と称される西除筋の第1の水元村であり，特権的な性格をもっていたとされるが，その状況は中世を遡る可能性があろう。ちなみにこれらに次ぐ村は西村・余部・大饗・小寺・松原・瓜破と北上し，野遠はその後の12位となっている。一方東除筋の分水順位は，1612年の段階で田井（1位），黒山(6)，多治井(7)，大保(8)，新福寺(9)となっている。（福島雅蔵 1984 「近世狭山池の管理と分水」『狭山町立郷土資料館狭山シリーズ14』）。

(153) ここで言う4類型と永原慶二氏による3類型(「中世村落の構造と領主制」『中世社会構造の研究』）との関係は未だ十分検討されていない。また渡辺澄夫氏による均等名型の構造との対比も今後の課題である。

(154) その意味でこの村落においては集村化のスピードが遅い可能性も考えられる。

(155) その範囲に位置する八下遺跡からは獣脚鋳型と考えられる資料が出土している。獣脚の盛行期は奈良から平安と言われており（内藤政垣 1937 「我国発見の獣客に就いて」『考古学雑誌』第27巻第1号），寺社などの注文による鋳造に関わった可能性がうかがわれる。

正保石高帳による1km²当りの単位収量の比較（面積の単位はkm²，いずれも概数）

村名称	石高	面積	係数	ランク
原寺	778	0.66	1183	A
西	804	0.95	847	A
北	355	0.44	809	A
丹南	675	0.84	804	A
中村	1138	1.42	803	A
太井	566	0.71	799	A
新堂	764	1.01	758	B
真福寺	264	0.36	738	B
菩提・大饗	1200	1.64	733	B
丹上	601	0.83	722	B
立部	381	0.55	695	B
石原・小寺	1120	1.64	685	B
北余部	567	0.83	681	B
今井	316	0.48	655	C
南余部	308	0.48	649	C
野遠	463	0.72	647	C
河合	521	0.81	643	C
岡	421	0.67	626	C
黒山	608	0.99	617	C
上田	699	1.13	617	C
多治井	695	1.28	544	D
大保	238	0.44	543	D
阿弥	377	0.77	487	D
西大塚	133	0.42	319	D

(156) 入間田宣夫　1980「平安時代の村落と民衆の運動」『岩波講座　日本歴史4』
(157) 前掲書註5
(158) 越田賢一郎　1984「北海道の鉄鍋について」『物質文化』42など
(159) 菅原正明　1989「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集
(160) 浅野晴樹　1991「東国における中世在地土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集
(161) 本宿・郷土遺跡では鉄鍋鋳型が出土しているものの，同時に大量の土鍋も確認されており，鉄鍋に特殊な機能を与えるか，供給先を限定するかの考え方も示されている（井上　太ほか　1981『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』富岡市教育委員会）。またこれと対照的な考え方もある。
(162) 拙稿　1992「四国の煮炊具レポート」『中世土器研究』第64号
(163) 豊田　武　1933「大山崎油神人の活動」『歴史地理』第62巻第5号。小野晃嗣　1989「油商人としての大山崎神人」『日本中世商業史の研究』法政大学出版局　補註4参照
(164) 坪井　1970　前掲書註1

鋳造遺跡の参考文献

1 紅村　弘　1975『金屋・星の宮遺跡』坂下町教育委員会
2 坪井良平　1977「梵鐘鋳型の出土例」『史跡と美術』477
3 石松好雄ほか　1978「第45次調査」『大宰府史跡　昭和52年度発掘調査概報』九州歴史資料館
4 林　博道　1978「梵鐘を鋳造した遺跡の調査」『月刊　文化財』第176号
5 前川威洋　1978「鋳造関係遺物」『福岡県南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集
6 石橋正嗣ほか　1979『軽野正境遺跡発掘調査報告書』秦荘町教育委員会
7 友野良一　1979「寺平遺跡の梵鐘鋳造跡」『月刊　文化財』第194号
8 中島　隆　1979『大山廃寺発掘調査報告書』小牧市教育委員会
9 石松好雄ほか　1980「第65—2次調査」『大宰府史跡　昭和54年度発掘調査概報』九州歴史資料館
10 中谷雅治　1980「恭仁宮跡」『埋蔵文化財発掘調査概報』第1分冊　京都府教育委員会
11 奈良国立文化財研究所　1980『飛鳥・藤原京跡発掘調査概報』10
12 友野良一　1980『寺平遺跡』長野県上伊那郡飯島町
13 石川長喜・昆野靖　1980『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ—柳田館遺跡—岩手県教育委員会
14 今井幹夫　1981『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』群馬県富岡市教育委員会
15 宮本敬一　1981『上総国分寺台発掘調査概報』千葉県市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団
16 石松好雄ほか　1981「第73次調査」『大宰府史跡　昭和55年度発掘調査概報』九州歴史資料館
17 小野正敏・金元賢治『豊原寺跡Ⅱ　華厳院跡第2次発掘調査概報』新潟県丸岡町教育委員会
18 吉川義彦ほか　1982『平安京左京八条三坊』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告　第6冊）
19 石尾政信　1982「広隆寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第5冊
20 五十川伸矢　1982「京都大学教養部構内ＡＰ22区の梵鐘鋳造遺構」『京都府埋蔵文化財情報』第5号
21 八戸市教育委員会　1983『史跡根城跡発掘調査報告書』Ⅴ　青森県八戸市教育委員会
22 下條信行ほか　1983『平安京左京八條三坊二町』（平安京跡研究調査報告　第6輯）財団法人　古代學協會
23 五十川伸矢ほか　1984「京都大学教養部構内ＡＰ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』
24 野洲町教育委員会　1984『昭和58年度　野洲町遺跡群発掘調査概報』
25 林　博通　1984「長尾遺跡の梵鐘鋳造跡」『古代研究』27　(財)元興寺文化財研究所
26 神崎　勝　1984「多可寺址出土の梵鐘鋳造遺構」『古代研究』27　(財)元興寺文化財研究所
27 山本信夫・狭川真一　1984「鉾ノ浦遺跡梵鐘鋳造遺構発掘調査速報」『古代研究』27　(財)元興寺文化財研究所
28 薬師寺嵩ほか　1984『谷津遺跡』千葉市教育委員会
29 横川好富ほか　1984『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告XIV　台耕地(Ⅱ)』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集）
30 郷堀英司ほか　1985『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書—花前Ⅱ—1・花前Ⅱ—2・矢船—Ⅲ』(財)千葉県文化財センター

31 中島利治　1985『猿貝北・道上・新町口　国道298号線関係埋蔵文化財発掘調査報告』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第52集）
32 吉永真彦　1985『滋賀里・穴太地区遺跡群発掘調査報告書』（大津市埋蔵文化財調査報告書）
33 工藤清泰　1985「浪岡城跡北館出土の鋳銅関係遺物について」『浪岡城跡』Ⅶ　浪岡町教育委員会
34 池田一郎ほか　1986『銭司遺跡』（加茂町文化財調査報告　第１集）加茂町教育委員会
35 神崎　勝ほか　1986『播磨産銅史の研究』妙見山麓遺跡調査会
36 山本　彰ほか　1986『真福寺遺跡』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
37 中村淳磯ほか　1986『松原市　観音寺遺跡　第２次発掘調査概要』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
38 森　　毅　1986「「船場」道修町の発掘調査」『草火』５号　（財）大阪市文化財協会
39 一山　典・滝山雄一　1987「大浦遺跡」『佛教藝術』174号
40 山本信夫・狭川真一　1987「鉾ノ浦遺跡」『佛教藝術』174号
41 笠井敏光ほか　1987「古市遺跡（86―１）」『古市遺跡群』Ⅶ（羽曳野市埋蔵文化財調査報告書14）
42 市本芳三ほか　1987『太井遺跡（その１）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
43 鋤柄俊夫ほか　1987『太井遺跡（その２）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
44 松山　聡ほか　1987『太井遺跡（その３）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
45 中村　茂ほか　1987『西島遺跡群（Ⅳ）』（群馬県高崎市文化財調査報告書第76集）
46 笠井敏光ほか　1988「野中寺」『古市遺跡群』Ⅸ（羽曳野市埋蔵文化財調査報告書15）
47 林　　純　1988「近江における金属の生産と流通」『近江の鋳物師』２　滋賀県教育委員会
48 森　　毅　1988「大阪府大阪城跡―大阪市道修町の町屋の調査―」『日本考古学年報』39
49 五十川伸矢ほか　1988「京都大学医学部構内ＡＮ18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』
50 五十川伸矢　1988「鴨東白河の鋳造工房―京都大学構内の鋳造に関する遺跡―」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』
51 金光正裕ほか　1988『日置荘遺跡（その１）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
52 鋤柄俊夫ほか　1988『日置荘遺跡（その２）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
53 東大寺・奈良県立橿原考古学研究所　1988『東大寺大仏殿西廻廊隣接地の発掘調査』
54 松村恵司ほか　1989『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所学報第46冊）
55 中村　浩　1989『八下』八下遺跡調査会
56 小野久隆ほか　1989『日置荘遺跡（その５）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
57 木下　亘　1989「巨勢寺跡」『大和を掘る　1988年度発掘調査速報展Ⅸ』奈良県立橿原考古学研究所
58 樫村友延・吉田生哉　1989「福島県番匠地遺跡」『日本考古学年報40（1987年度版）』
59 谷口俊治　1990『室町遺跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第95集）（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
60 谷口智樹　1990「矢倉口遺跡（第23次）発掘調査概要」『草津の古代を掘る　平成元年度遺跡発掘調査報告会資料』草津市教育委員会
61 平井寿一ほか　1990「中村遺跡」『埋蔵文化財発掘調査　1989年度　年報』（財）栗東町文化体育振興事業団
62 杉山　洋　1990「奈良時代の金属生産」『佛教藝術』190号
63 野田　芳正　1990「堺環濠都市遺跡（ＳＫＴ82地点）発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第34集　堺市教育委員会
64 續　伸一郎　1990「堺環濠都市遺跡（ＳＫＴ153地点）発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第51集　堺市教育委員会
65 嶋谷和彦　1990「北花田口遺跡（ＫＨＧ２地点）発掘調査報告」『堺市文化財調査概要報告』第５冊　堺市教育委員会
66 鋤柄俊夫ほか　1990『太井遺跡（その４）・日置荘遺跡（その１―２）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
67 入江正則　1990『日置荘遺跡（その２―２・その６）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
68 浜崎一志　1990「京都大学医学部構内ＡＬ20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1987

年度』
69　坂井秀弥　1990「出雲崎町寺前中世遺跡の調査」『新潟県考古学会第２回大会研究発表会　発表要旨』
70　久田正弘ほか　1990「林窯跡」『社団法人　石川県埋蔵文化財保存協会年報』１
71　山本信夫　1990「太宰府を中心とした鋳物生産遺構について」『梵鐘の音は時を超えて』美原町
72　鋤柄俊夫　1990「太井遺跡の鋳造遺構について」『梵鐘の音は時を超えて』美原町
73　近藤　広　1990「古代の鋳造関連遺構と鋳型の発見」『滋賀考古』４
74　尾野善裕　1990「清水遺跡出土の鉄滓と三州平坂鋳物師」『(財)愛知県埋蔵文化財センター平成２年度年報』
75　新潟県教育庁文化行政課　1990「寺前遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査だより』No.６
76　富山県埋蔵文化財センター　1990「鉄の鋳造にかかわる遺物」『埋文とやま』第30号
77　富山県埋蔵文化財センター　1990「小杉町上野南遺跡群」『埋文とやま』第31号
78　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1990『金井遺跡Ｂ地区現地説明会資料』
79　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1990『住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財発掘調査現地説明会資料〔足洗遺跡〕〔金井遺跡Ｂ区〕』
80　橋本奈保子　1991「辻遺跡」『埋蔵文化財発掘調査　1990年度　年報』(財)栗東町文化体育振興事業団
81　古川知明　1991「富山市三熊内山窯跡」『埋文とやま』第35号　富山県埋蔵文化財センター
82　續　伸一郎　1991『日置荘遺跡発掘調査概要報告—ＨＫＳ—９地点・堺市日置荘原寺町215—１—』（堺市文化財概要報告第21冊）
83　五十川伸矢　1991「中世白河の鋳造工房」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅳ
84　栗原和彦ほか　1991「第121次調査」『大宰府史跡　平成２年度発掘調査概報』九州歴史資料館
85　浅尾忠明ほか　1991「上喜来蛭子〜中佐古遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報　Vol.２　1990年度』
86　植山　茂ほか　1991『平安京左京四条四坊四町の調査概要』京都府京都文化博物館
87　福島県教育委員会・(財)福島県文化センター　1991『山田Ａ・山田Ｂ遺跡現地説明会資料』
88　奈良県立橿原考古学研究所付属博物館　1991『大和を掘る』
89　鋳造遺跡研究会　1991『鋳造遺跡研究会　資料』
90　入江正則　1991『日置荘遺跡（その２—３・その６）』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

補　註

1　拙稿　1992「日置荘遺跡出土の瀬戸内東部系須恵器甕について」『大阪文化財研究』増刊号

2　さてこの分析の目的と運用についてであるが，その目的はほかでもなく村落異動（景観変化）の復原にある。たとえばある村落が分散または集合する時，その村落の動産・不動産および人口・生産力などをなんらかの数値に置き換えることができれば，その異動の状況は数値の増減による変動で表現できることになる。考古学的調査においてその数量は建物数または各種の遺構数および遺物などを係数として表現することになる。ところで，村落の異動はしばしば移動を伴って説明される場合がある。つまりその数量の変化には内的要因である人口の自然増以外に，外的要因として，他村との結合または周辺村落への分散を原因とするものがみられるのである。したがってある村落の変化は，その村落の固有数値の変動だけでなく，多くの場合，その周辺の村落の数量変化と連動して表現される可能性が高いことになる。この分析はこの前提に立ち，分析対象地域を広げ，資料の収集をおこなった。今後条件を整備することにより，さらに予測的な分析も可能ではないかと考えている。

3　そのほか文安四年（1447）におこなわれた高野山大湯釜の鋳造記録からも，材料と施設の規模が知られる。はじめに大工右衛門尉長継，脇大工大和三輪の衛門次郎など５，６人の鋳物師が鋳型造りに従事し，材料としては360荷以上の鋳型土・砂が運ばれ，糠100荷，藁100荷，堅炭150荷以上，鍛冶炭160荷が用意された。一方作業屋としては，５間４間の舎屋１棟，鞴８丁をおく仮屋８棟が設けられ，鋳型造りの家は４間四方で１棟，奉行人の家は１棟つくられている。なお鉄は877貫用意されている。

4　また鉄の流通に関しては，正嘉元年（1257）に離宮八幡宮油座神人が荏胡麻売買の往来に際して鉄の搬送をしている例「離宮八幡宮文書」，応永末年に起こった近江国得珍保商人と小幡商人との紛争で鉄一駄が押収されている例「今堀日吉神社文書」がみられる（仲村　研　1982「中世の大工・刀工・鋳物師と技術」『技術の社会史』１　有斐閣）。

脱稿後，埼玉県金井遺跡の新報告（馬橋泰雄・赤熊浩一　1992「埼玉県金井生産遺跡の調査」『中世都

市と商人職人』名著出版）と丹南における新たな鋳造遺跡の調査資料（大阪府敏育委員会　1992『岡３丁目遺跡発掘調査現地説明会資料』)を得た。金井遺跡では梵鐘撞座の文様などが報告され，岡３丁目遺跡では大型建物に伴うとされる鋳造遺構の検出と，日置荘遺跡出土と類似の瓦の出土をみている。同類の瓦当文様については堺市の新金岡更池遺跡でも出土しており，鋳造グループ以外の要素の検討も必要であるが，共に興味深い資料である。今後の調査・整理が期待される。

河内鋳物師関連年表

参考文献	年号	西暦	記事
	和銅１	708	従５位上**多治比**真人三宅麻呂，催銭鋳司長官。
8	延喜17	917	京都府京都市深草道澄寺(河内様式)。
166	寛治５	1091	能登介時貞（河内国住人），紀伊国高野山奥之院宝形・露盤。
『平安遺文』2007	保安５	1124	**広階**重任(専頭)
13	大治４	1129	**丹治**類友，奈良県成身院(神戸市徳照寺)
11	保延７	1141	**丹治**○（散位），奈良県金峯山寺（奈良県吉野町廃世尊寺)。**広階**頼○（散位），依○，奈良県金峯山寺。
『平安遺文』2589	久安２	1146	**広階**信時，八上郡野遠萩原里35坪１反を頼円から鉄120斤で購入。
11	永暦１	1160	**船**　是守（散位），奈良県金峯山寺（奈良県廃世尊寺)。
註２網野1982	永万１	1165	蔵人所小舎人，惟宗兼宗は狭山郷の鋳物師に燈炉以下鉄器供御人を設置，番頭を決める。
網野Ａ-１・２，『大阪府史』	仁安２	1167	河内国直○，若王寺懸仏。蔵人所牒「興福寺領日置荘，雑役免除」。
『兵範記』	仁安３	1168	惟宗兼宗・**草部**近正(近国父)・**矢田部**則弘(久則父)，**清原**季宗・**中原**守時・久盛・安久(本定額)。**矢田部**久則・**紀**　友弘・**草部**近国・**丹治**宗時(定額)。**広階**忠光がはじめて「惣官職」に補される。
『吉記』	承安４	1174	日置荘作手が「造内裏役」免除要求
『平安遺文』3688	承安５	1175	**広階**近重(頭領)
15	安元２	1176	和歌山県高野山延寿院（和歌山県美里町泉福寺）（河内様式）
『醍醐寺雑事記』，137，138	寿永２	1183	**草部**是助，上醍醐湯釜，鉄800斤。三宝院湯釜，鉄210斤。是助(大工散位)，是弘(大工長)，助延(大工)，小工11人，東大寺大仏修理。
『地名辞典』	元暦１	1184	**草部**信明，河内国布忍寺。
1027	建久７	1196	**広階**忠次(忠光子)，神奈川県極楽寺
156	建久８	1197	**草部**是助(大工従五位下豊後守宿祢)，助延(従五位下)，是弘(従五位下)，山口県阿弥陀寺鉄製宝塔。是助，東大寺湯船。笠置寺。
『鎌倉遺文』２-1071～75他	正治１	1199	**広階**重任(河内国住人鋳物師大工)，(長瀬荘下司高橋成延第６女夫)，(荘官)，唐懸田地３反を開発，子は貞重・近重，堺相論。
『俊乗房重源史料集成』	建仁３	1203	**草部**是助(河内権守)，備前より畠地子の中から麦100石と船賃７石をもらう。
22，23	承元４	1210	**丹治**則高，和歌山県高野町金剛三昧院。和泉一宮天光大明神(京都府宇治市)（河内様式)。
『地名辞典』	建暦１	1211	故**広階**延忠先祖相伝の地(丹南郡黒山郷河辺里)23坪１反。
註２網野1982，	建保３	1215	**丹治**国則，大和森屋新薬師寺。阿入が広階系惣官（回船鋳物

参考文献	年号	西暦	記事
『大阪府史』			師）に補任。**広階**光延（日吉社聖真子神人兼燈呂供御人并殿下御細工等）阿入を非難。
『建保度長谷寺再建記録』	建保7	1219	**丹治**則俊，奈良県長谷寺大鐘竜頭，片裏金鼓2など，絹5切れを給う。
26	承久3	1221	大阪府狭山庄内○勝寺（和歌山県弘法寺）（河内様式）。**草部**助延(筑前権守)六波羅御教書。
27	貞応3	1223	**土師**宗友(散位)，讃岐国金蔵寺(香川県千光寺)。
32	寛喜3	1231	**土師**宗友(大工散位)，近江国己高山(滋賀県日吉神社)。
1040	貞応1	1232	**大中臣**弘兼(大工)，河内国八上郡金太郷得勝寺
1044	文暦1	1234	**草部**信(延)時(東大寺)，河内布忍寺。
網野A-10	嘉禎2	1236	**広階**友清・友安(番頭)。**草部**延時(助延の子，助時の父)・貞依・助忠・則國・貞國・友國・助房・助則(番頭)。蔵人所が左方の番頭の特権を確認。鎮西が左方へ。**膳**貞延(左方番頭)。**布忍**忠村・為安・助吉(左方番頭)。**紀**景久(左方年預)，助安(番頭)。**氷**貞仲・則延・清則(番頭)。**橘**影延(番頭)。**山川**助清(番頭)。
『日本古鐘銘集成』	延応1	1239	**草部**延時(大鋳物師左兵衛志)東大寺鐘釣り具，他に小工20人。
33	寛元2	1244	兵庫県浄橋寺(河内様式)
35，139	寛元4	1246	**丹治**国高(惣大工)，(多々羅座別列大工)国貞，国則，師国，頼高，友弘，則友，紀伊国金剛峯寺大湯屋釜。**草部**延時(東大寺鋳物師惣官左兵衛志)その職を子の助時に譲る。**土師**宗貞(大工散位)，大和国金剛山寺。
36，1048	寛元5，宝治1	1247	**山川**助清(東大寺大工散位)，美濃国清水寺(愛知県八社神社)。**佐山**太郎，鹿児島県飯倉新宮。
網野A-11	宝治2	1248	**草部**，東大寺鋳物師惣官職を中原光氏にうばわれようとする。右方燈炉作手は長門守の件で解を提出。**中原**光氏(左方燈炉作手惣官)蔵人所に解を提出(門司・赤間・嶋戸・竈戸・三尾などの件)。
41	建長3	1251	**丹治**国忠(大工河内国)，愛媛県丹原町興隆寺
44	建長7	1255	**丹治**助利(山口)，山口県平生町般若寺
1057	建長8	1256	**広階**重守，下総国金光明寺。
46，1059，1060	正嘉1	1257	**丹治**国忠(大工)，京都府加茂町海住山寺。国光，茨城県松原村荒川八幡。助利(山口)，山口県大内村興隆寺。
47	文応1	1260	**丹治**久友・真重(新大仏大工)，武蔵国新日吉山王宮。
網野A-11，50，1064	弘長2	1262	**丹治**国則，大和国新楽寺。**土師**宗貞，山城国壬生寺。**平**　為重（左方番頭）。右方は日置・金田・長曽根。左方は堺・塩穴・石津。関東へ移住する鋳物師が増加。**中原**光氏(右衛門少尉)左方惣官の確認を求める。
52，53，1066	文永1	1264	**丹治**久友（新大仏寺大工）奈良県東大寺，大和国吉野郡蔵王堂。**広階**友国，大和国吉野郡蔵王堂・重永，上総国胎蔵寺。**藤原**行恒，大和国吉野郡蔵王堂。
55	文永2	1265	和泉国宗福寺(和歌山県かつらぎ町北辰妙見社)（河内様式）
1067	文永3	1266	**広階**重永(長)，上総国真行寺。**中原**光氏を左方作手惣官職とした蔵人所牒の大府宣。
網野参-7	文永4	1267	**中原**光氏(左方惣官)が鎮西鋳物師を掌握。
『大阪府史』	文永5	1268	**丹治**国則(大工左馬允)，近江新日吉社。
1072	文永11	1274	**山川**助永(大工)，摂津国盛福寺。

参考文献	年号	西暦	記事
58, 60	建治 1	1275	**丹治**久友(新大仏寺大工), 茨城県土浦市般若寺。**平**　久末(大工河内国丹那郡黒山郷下村住人), 香川県滝水寺(香川県長勝寺)。
61, 62, 1077	建治 3	1277	**丹治**国則(大工左馬允), 滋賀県余呉村菅山寺, 河内国長楽寺。**平**　重永(大工), 和歌山県桃山町大歳神社。
66, 67	弘安 3	1280	沙弥恵念, 河内国教興寺(和歌山県金剛峯寺) (河内様式)。**河内**助安(大工), 和泉国貝塚市地蔵堂(滋賀県びわ村本誓寺)。
70	弘安 6	1283	**平**　貞弘(大工), 兵庫県洲本市千光寺。
73, 1089	弘安 7	1284	**丹治**恒頼(大宰府住人), 薩摩荘浄光明寺。**紀**　盛忠(左馬允), 高知県高知市竹林寺。
75, 『日本の梵鐘』	弘安 8	1285	**物部**国光 (大工)・吉光・国友 (引頭)・国家・国氏, 東寺大塔桝形造営。**山川**助永(東大寺大工), 紀伊朝日寺(和歌山県大日寺)。
76	弘安 9	1286	**河内**助安(大工), 愛媛県興隆寺。
78	弘安10	1287	**大春日**国正(大工)(四郎太夫)と地元小工18人, 熊本県大慈寺。
79	弘安11, 正応 1	1288	**橘**　則弘, 丹波巌辺寺 (山城国華光寺)。**伊岐**得久 (左方兼東大寺燈炉供御人兼住吉大明神修理鋳物師兼堀郷住人), **山川**助時(左近将監)が鉄屋を止めたことを蔵人所に訴える。
1093	正応 2	1289	**山川**助永, 和泉国道教寺。**橘**　則弘, 山城国行願寺。
80, 172, 173	正応 3	1290	**山川**貞清(大工), 丹後国宮津市興法寺湯船, 宮津市等楽寺湯船。**矢田部**宗次(大工), 近江国神田社(滋賀県正源寺)。
84, 85	正応 5	1292	**山川**貞清(大工), 大阪府東大阪市慈光寺。助永(大工), 大阪府勝軍寺(大阪府貝塚市道教寺)。
1098	正応 6	1293	**橘**　則正, 悲田院。
87, 1103	永仁 4	1296	**山川**貞清, 山城国醍醐寺。内蔵範頼, 阿波金剛光寺(京都市峯定寺) (河内様式)。
89	永仁 6	1298	**白坂**助友(河内国), 紀伊国風森宮(岡山県妙国寺)。
90	正安 1	1299	**大春日**重守(大工河内国), 但馬国豊岡市東楽寺(高知県妙国寺)。
93	正安 3	1301	**氷**　友末(大工), 伯耆国長谷寺(鳥取県国英神社)。
95, 185	乾元 2	1303	**藤原**則清(大工), 河内国新福寺旧銘(大阪府柏原市西願寺)。**河内**助安(大工河内国丹南郡黒山郷), 滋賀県秦荘町金剛輪寺。
98	嘉元 3	1305	**平**　正継(大工), 静岡県長楽寺。
99, 『大阪府史』	嘉元 4	1306	**丹治**宗貞, 陸奥長勝寺？。治部入道浄仏(河州旦南), 摂津安曇寺(京都市安祥寺)。
106, 1119, 1121	延慶 3	1310	**紀**　家光(大工), 千葉県大慈恩寺。**平**　吉近(大工), 肥後国浄光寺。**伊岐**得実(大工), 山城大乗院。
111	正和 5	1316	**丹治**是友(岡山), 岡山県賀陽町清水寺。
112, 1136	元応 1	1319	**草部**延継, 備前国金剛院旧銘。**山川**助綱(小工右衛門尉), 山城国勝竜寺(大阪府能勢町真如寺)。**清原**得光(大工), 山城国勝竜寺 (大阪府真如寺)。**橘**則国 (大工), 東福禅寺。
118	元亨 2	1322	和泉国善福寺(奈良県上北山村宝泉寺)。
120, 1142	元亨 4	1324	**山川**貞継(大工河内国比叡岳東大兼左兵衛尉), 播磨国円教寺。**河内**介弘(大工河内国住人), 和歌山県那智勝浦町青岸渡寺。
124	正中 2	1325	○○○光吉(大工河内国), 新宮大雄禅寺(兵庫県姫路市英賀神社)
125	嘉暦 2	1327	**丹治**大工国真(山口), 周防国阿曾社(山口県神護寺)
1147	嘉暦 4	1329	沙弥西念 (大工), 山城国建仁禅寺。

参考文献	年号	西暦	記事
139	建武 2	1335	**丹治**友重(大工)，広島県吉田町高林坊石室寺
140	建武 4	1337	**藤原**国安(大工)，近江国西念寺(愛知県陣目寺)
143	暦応 2	1339	**橘**　則正(小工)，常陸国浄国禅寺(茨城県華蔵院)
坪井1989「中世鋳物師本貫補遺」	延元 5	1340	**伊岐**友安(大工)，流山八幡湯釜
148	康永 1	1342	河内国蒿福寺(奈良県西吉野村堀大丈夫)
『大阪府史』	康永 2	1343	**丹治**国光，常陸荒川八幡
1177	康永 4	1345	**藤原**国安(大工河内住)，三河鳳来寺
153	貞和 2	1346	**丹治**則延（大工）（兵庫？），兵庫県三木市蓮華寺
159	観応 1	1350	**丹治**宗貞（大工）？，筑前国禅寿禅寺（島根県心光寺）
『大阪府史』	正平 7	1352	**藤原**国安(河内権守)，武蔵威徳寺
『大阪府史』165	文和 2	1353	**藤原**国安(大工河内国丹南郷住)，三河福林寺(愛知県岡崎市大樹寺)。治部入道，三河福林寺。
167	文和 3	1354	**藤原**国安(大工)，兵庫県三田市(奈良県当麻町当麻寺)
171	正平13	1358	和歌山県満福寺(河内様式)
175	正平18	1363	**大中臣**弘義（大工）？，山口県正法寺
180	貞治 3	1364	**平**　盛光(大工河内国)，兵庫県北条市酒見寺
189	応安 2	1369	讃岐国妙福寺（和歌山県本覚寺）（鎌倉時代河内様式）
『大阪府史』	応安 6	1373	**藤原**友吉（我孫子住人），和泉大鳥郡万代八幡宮
『河内鋳物師とその作品』	応安 8	1375	**山川**右衛門尉助頼(大工摂州住吉郡堺住)，高知県金剛福寺多宝塔伏鉢
206	永和 5	1379	**山川**助頼(大工右衛門尉)，河内国金田宮(兵庫県五色町河内神社)・(大工堺住)，日向国円興禅寺。
35	至徳 2	1385	**山川**助頼(大工堺北庄住)，土佐国金剛福寺鰐口。
『地名辞典』	明徳 4	1393	土佐寺如意輪観音堂は元河州丹南郡狭山庄満願寺社之鰐口
160	応永 5	1398	**高大路**家久(河内国)，美濃国不破郡神宮寺鉄塔
3	応永22	1415	八郎兵衛(丹南鋳物師)，奈良県奈良市興福寺本尊
「中世鋳物師本貫補遺」	正長 1	1428	**紀**　広行(大工高野大夫入道沙弥文浄)，近江国金剛定寺
網野参-23	宝徳 1	1449	和泉河内両国鍬鉄物師，関東御教書
網野参-24	宝徳 2	1450	和泉河内両国鍬鉄鋳物師，室町将軍家御教書
網野A-22	宝徳 3	1451	河内国109人の鋳物師座法，かつた村17人，あひこ村21人，東堀村 6 人，新在所村10人，西堀村21人，内かいと村23人，にわい村 7 人，大豆塚 4 人。
53	長禄 2	1458	**丹治**改国(山口)，山口県下関市吉母若宮神社鰐口
304	長禄 4	1460	**丹治**直則(兵庫？)，摂津国安養寺(兵庫県神戸市須磨寺)
『大阪府史』	明応 4	1495	**丹治**国光(河内権守)，武蔵国善福寺鰐口
112	永正10	1513	**平**　重長(河州○○駒ヶ屋住人)，伊勢国汲泉寺雲版
『地名辞典』	大永 2	1522	○饗郷西明寺鰐口
網野A-29	大永 5	1525	**広橋**兼秀(権左少弁)「右方，左方，大仏方」
『狭山町史』	天文12	1543	**藤原**家定(住吉山内)
『地名辞典』	永禄12	1569	源三衛門(金太鋳物師)が堺，摂津へ金屋をつくる
『狭山町史』	文禄 5	1596	**藤原**家次(我孫子杉本)
123	慶長 9	1604	**広階**助忠(河内国八上郡能登生郷)，讃岐国弥谷寺扉

参考文献の数字は，註１の坪井1970，網野＋記号は註２の網野1972，1973からの引用を示す。その他註１，註２の他の文献も参考としている。

（大阪文化財センター　国立歴史民俗博物館共同研究員）

Sites of Settlements of Craftsmen in Tannan in the Middle Ages

SUKIGARA Toshio

The area in and around Mihara Town in Kawachi County, Osaka, is known as the home of the "Kawachi iron founders", who were active from the later Heian Period to the Period of the Northern and Southern Dynasties. Studies on this region have been made mainly based on inscriptions on stone monuments, and bibliographical materials; however, as excavational investigations in this region have progressed, founding sites and contemporary settlement sites have been discovered, enabling studies to be made from an archaeological approach.

Now, most founding sites from the Nara Period onward which have so far been investigated were for the most part annexed to temples or provincial government offices, and the main objects of analyses have been earthen pits for temple-bell casting, furnaces, molds connected with Buddhist alter fittings, and slag. However, from founding sites in Tannan, Kawachi, fragments of molds for cooking pots etc., furnace walls and slag have been excavated from groups of structures that constituted ordinary settlements; traces of foundry-related facilities have also been detected from some of them. These were found within the sites of medieval settlements accompanying foundry facilities. It is also highly possible that the settlement sites in this region are closely related to the records that Tannan, Kawachi, was the home of iron founders.

On the basis of the above assumption, the author, in this paper, focuses on the settlement of craftsmen as he reconstructs the medieval villages of Tannan, and considers how they related to the special social being of Kawachi iron founders shown in the results of bibliographical studies.

This study can be divided into two parts, on medieval villages and on founding sites. In the former, the author restores the environment in which villages came into being, by means of historical geography and scenic restoration assuming conditions of irrigation, and also restores the location and scale of villages, and their movement from the Ancient to the Modern Period, using bibliographical records and quantitative analysis of sites. In the latter, the author picks out the characteristics of remaining structures through an arrangement of founding sites nationwide, and those of remaining articles through an examination of the Hioki-no-shō Site; he also points out the importance of non-fixed type earthen pits and warehouse space in founding works, and the special distribution system of the iron founding qroups.

These analyses made it clear that the villages in Tannan probably had at least two different processes of change according to the different conditions of the environment in which they came into being, and that the same trend can be seen in the ironfounding settlements that were attached to them. Concerning this hypothesis, the author presents an example of the reconstructed scenery of an iron founders' village, modeled after the Hioki-no-shō. This will probably be taken up as a matter for sociological restoration and examination, together with the question of its relation with the two lineages of Tannan iron founders.